
とあるZEROの能力者

マニマニの悪魔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とあるZEROの能力者

【Nコード】

N0619L

【作者名】

マニマニの悪魔

【あらすじ】

『覚える能力』を持つ主人公…鬼龍内人^{きりゅうないと}は、高校生活の初日に同じクラスの上条当麻と出会う。

上条当麻と出会った鬼龍内人は、色々な事件に会う。

その中で多くの人と出会い、そして魔術に関わることになる。

その中で内人は、何を見つけ、そして何を知るのだろう。

現在1月17日PV32万アクセス！ユニーク2万9千アクセス！ポイント520！登録数188！ありがたいです…

出来れば…感想、お気に入りに登録してくれると作者は次回作を書く意欲が出てきますので…よろしくお願いします!!

ZERO (前書き)

初投稿です。

今まで小説なんて書いたことがなかったので誤字、脱字がいっぱいあると思います。それと、更新は、不定期です。そこを忘れないで読んでもらえると嬉しいです。

ZERO

目が覚めたらベットのの上にいた。

起きたばかりという事もあり思考回路は、停止していて何が何だかよく解らない状態だった。

その時、

ガラガラガラ：

と音が鳴った。

その音が鳴った方向に目をやると一人の女の人がいた。

「お体の具合は、どうですか？」

とっさに、

「いえ：とくに何もあります：」

言葉が無意識にでた。

その女の人は、さらに自分にこう言った。

「無事にシステムスキャンが終わりましたよ」

「へっ：？あ、ハイ」

やっと思考回路が目覚め、システムスキャンが終わった事を知り心の底から喜んだ。

長年の夢が叶ったと。

今まで、どんなに願っても来る事ができなかった学園都市に来るこ

とができた。

それと自分にどのような能力があるのか興味があったのも確かだ。

「君の…いや、鬼龍内人君の能力は…」

その言葉を聞き思わず、

「くっ…」

ツバを飲みこんだ。

「覚える能力です」

「ん???」

一体何を覚えるの?それって能力なの?と色々な事を考えていた。
しかしその女の人は、戸惑っている内人を無視して、

「覚える能力:簡単に言うとZEROね」

「ZERO?」

「そうZEROよ」

「そのZEROと言った能力は、一体…」

「相手の能力をマネすることができるとしか言いようがないわ」

「と、言いますと…」

「んゝ実は、よく解らないのよ。だって今までのカテゴリーに無い能力だからね」

よく解らない能力…何だそれ？もっとカッコイイ能力を言われると思っていた。それもそのはず、ここにくるまで思い描いていた能力は、炎を操ったり、手から光線がでたり、腕が伸びたりするような能力だった。だから正直なところ…いや結構残念だったりしていた。

「…何だよ覚える能力って」

「えっ？今何か言いましたか？」

「いえ…とくに…」

「後、levelは、1だから」

「1ですか…」

1って、五段階中の1だよな…level1（低能力者）ってことだなよな…。今の彼は、明らかに落胆していた。その様子を察した女の人は、

「大丈夫ですよ。最初は、みんなlevel1とか2ですから」

「そうですか…」

「そうですよ！だから頑張ればいくらでもlevelは、上がりますよ」

「そうですね。うん。頑張ることにします」

「それでは、これで私は、失礼します」

ガラガラガラ…

そして女の方は、部屋から出ていった。

改めて自分の能力を確かめてみた。

覚える能力…一体なんなんだろう。

でも来週からは、高校も始まるし深く考えても仕方がない。

だから能力のことを考えるのは、今は、止めておこうと思った。
こうして学園都市の初日は、幕をとじた。

ZERO（後書き）

どうでした？

読んでもらった通り、文章を書く能力は、全くないですね。
恥ずかしい限りです。

それと覚える能力は、ニードレスからとっています。

次回作を読んでもくれると嬉しい限りです。

能力の使い方（前書き）

やっと主人公が能力を使います。急いで書いたので、誤字、脱字があると思いますが気にしないでください。
んじゃ読んでやってください。

能力の使い方

システムスキャンが終わってから一週間がたった。
学園都市の多くの生徒は、寮生活をしなくてはならない。
内人も例外ではない。

「まったく…学園都市に来れたのはいいが…寮生活なんて俺に出来るか…」

寮生活を完全になめていた。

料理は、親の料理の手伝いを少ししてただけで一人では、全く料理が出来ない状態であった。

洗濯なんて寮に来て始めた。

そんなこんなでまともな食事をしていなかった。

さすがにそれは、まずいと思い料理本を買いに外に出た。

出たまでは、よかったが何処に行けばいいのが解らなく困っていた。

「来て思ったが学園都市のこと何にも知らなかったな、俺…」

と独り言を呟いてみたりする。

なぜかって？暇だからだ。

「本屋何処だよ………ん？」

そこで目に入ったのは、ジャッジメントだった。

いくら学園都市のことがわからなくてもジャッジメントの事は知っていた。

何故ジャッジメントが居ることに気が付いたかというと、腕にジャッジメントの腕章をしていたからだ。

そのジャッジメントに本屋までの道を聞くことにした。

「あのくすいません？」

「はい、どうされましたの？」

「本屋までの道のりを教えてほしいんですけど…」

「本屋ですの…本屋ならその道を左に行って突き当たりを右に…
って貴方、見た所まだ学園都市に来て間もないですわね！」

「なっ!!」

「やはりそうでしたか」

「はい…まだ一週間です」

「仕方がありませんの。本屋までわたくしが連れてってあげますわ」

「マジですか!？」

「!?!?……マジですよ」

この時、内人は、凄く感動していた。

学園都市に来て、始めて人に親切にしてもらったことが本当に嬉しかった。

恐らく、その感動からかいつしか大きな声になっていた。
その言葉にそのジャッジメントは、驚いていた。

「いやージャッジメントの人に聞いて良かった」

「それがジャッジメントの仕事ですから、当然の事をしたまでですの」

そのジャッジメントは、少し自慢げに言った。
そして二人は、本屋に向かって歩き始めた。

「貴方のお名前は、何と言いますの？」

「!?!?…俺の？」

「はぁ…貴方以外誰が居ますの？」

彼女は、明らかに呆れた顔をしながら内人に言った。

「えゝと俺の名前？俺の名前は、鬼龍内人」

「鬼龍内人…ですか…覚えておきますわ。わたくしの名前は、白井黒子と言いますの」

「よろしくな」

「ええ、こちらこそよろしく願いますわ」

「それじゃ黒子って呼ぶな」

「んな!?!? 貴方、人をいきなり下の名前で呼ぶなんて! なんてデリカシーがない人ですの…」

こんなくだらない話をしているうちに本屋に着いた。

「料理、料理っ…」

「料理の本ならここにありますわよ」

「おっ！本当だ。ありがとな」

「いえいえ、そんなたいした事では…」

ガラガラガラガラ：

「ん！？」

「一体今の音は、何ですの！？」

突然向かい側の銀行のシャッターが下りた。

一体中で何が起ったか周りに居る人達は、理解が出来なかった。理解が出来なかったのは、内人と黒子も同じだった。

だが、中で起きている事は、内人でもわかる。

それは、銀行強盗という物だ。

誰もが一度は、耳にしたことがあると思う。

まさかその銀行強盗が目の前で行われてるとゾッとする。

中では、拳銃を持った犯人が暴れ回るのだと、今のいままで思っていた。

しかしその考えは、一瞬で崩れる事になる。

ズドーン

激しい爆発音と共に中から三人の人間が出て来た。

「何だよ今の爆発音!?!」

「能力者…ですわね」

「はぁー!!! 能力者ってあんな事出来んのかよ!!!」

「出来ますわよ…それより貴方、少し下がっててくださる?」

「へ?」

黒子は、話を言い終える前に自分の目の前から姿を消した。
何処に居るのだろう、と周りを見渡すと強盗達の目の前に立っていた。

「ジャッジメントですの! 器物破損及び強盗の現行犯で拘束します
!!!」

あれれ…ちょっと黒子さん…少しキャラ変わっておりませんか?
などと内人が考えている時に、

「くっくっくっ」

強盗犯の一人が笑い始めた。

「何故笑っているのですか?」

「くっくっ…ジャッジメントも堕ちたもをだなあ」

「何を言っておりますの?」

「だあゝかゝら！ジャッジメントも堕ちたもんだなゝって言うてんだよ！！人で不足で子供まで仕事をさせるってかあゝ。くつくつく笑わせるね！」

「何を寝言を言っているのでしょうか？と、いうか寝てますの？」

黒子は、強盗達から一步も引かない。

その姿を見た強盗の一人が、

「ガキの癖にごちゃごちゃ言ってるじゃねー！」

その瞬間、強盗達の中の一人の手から炎がでた。

内人は、認識できる能力を初めて見た。

それは、あまりにも大きな衝撃を与えた。

しかしそれは、内人に恐怖を与える物ではなく、彼の中で何かが目覚めるような感じだった。

「俺の能力は、パイロキネシスト発火能力だ。level 3だ！」

そしてまた一人が口を開け、

「悪いがお前が泣いて喚いてもフルボッコにするけどいい？」

「はあゝ口で言っても分からない殿方は、困りますわ…、たかがlevel 3でわたくしが泣いて喚くとも思います？」

恐らく、その言葉が彼らの勘に触れたのだろう。

手に炎をまとった強盗が叫んだ。

「死ねや！クソガキがあゝ！！！」

そのまま黒子に突っ込んだ。

しかし黒子は、それを微動だにしない。

今、強盗の腕には炎がまどっていた。

その腕で黒子に殴りかかるがそれを簡単に避け、右足で強盗の足を引っ掛け強盗を転ばせる。

さらに追い撃ちをかけるように転んでコンクリートの上で倒れてる強盗の背中を踏み付ける。

ドスッ！！

「グアア！」

強盗を踏み付けたまま残り二人の強盗に言った。

「貴方達も、こうなる前に降参する事をオススメしますわよ」

「チッ！」

舌打ちをした強盗は、近くにあった鉄パイプに手をかざした。

鉄パイプは、宙に浮きそのまま黒子に襲いかかる。

「!？」

さすがの黒子も宙に浮いた鉄パイプが襲いかかってくることは、予想外だった。

テレキネシス

（念動能力ですわー！！）

しかし、その鉄パイプを目の前にしても黒子は、冷静だった。

鉄パイプが当たる瞬間、黒子の姿が消えた。

消えた黒子は念動能力者の背後に立っていた。

まるでプロの格闘家も驚くほど綺麗な回し蹴りをくらわせ強盗を悶絶させると、

「さあ、どうします？もう一人になってしまいましたか・・・降参しますか？」

と、言い放った。

しかし圧倒的な力を前にしても強盗は、笑っていた。

「くっくくくく・・・」

それを見た黒子は、呆れて言った。

「もう、諦めたらどうですか？」

「諦める？笑わせるなよ・・・たとえ今の二人を倒したとしても、俺を倒すことは出来ない！！」

最後の強盗が黒子に襲いかかる。

しかし強盗が殴りかかったがそこには、黒子の姿は無かった。

そして、また強盗の背後をとることに成功した黒子は、先ほどよりも強く強盗に蹴りかかった。

しかし、

グチャ

何かが潰れる音がした。

黒子は、その音が鳴った方向に目をやると、自分のお腹に目だった。

何と強盗の拳がお腹にめりこんでいることを確認すると、黒子は”何かの力”によって後ろへ大きく吹きと飛ばされた。

「う、ううう、うえええええーっ！」

その、あまりの衝撃に黒子は、吐き出してしまった。吐き出している、黒子の姿を見た強盗は、

「くっははははっ！！最高だな！いい気味だなージャッジメントよー！！！」

「う、う、うつ・・・」

黒子は、その場で動けなくなりうずくまっていた。

そんな、中でも黒子は何故、どうして、自分はこのような事になってしまったのか考えていた。

（何で・・・何ですの・・・どうしてわたくしのテレポートの位置が・・・）

「ジャッジメント！テメーの能力は、瞬間移動テレポートだな！」

（チッ・・・さすがにバレていましたか・・・）

黒子の考えによると、おそらく鉄パイプをテレポートで避けた時に能力がバレた、と考えていた。

「何故・・・わたくしがテレポートした位置が分かったの・・・？」

「くつくつくっ・・・俺の能力だよ・・・俺の能力は、触れた物を振動させる能力だ。お前の能力が分かった時から、俺の周りの空気を微弱の振動で振るわせたただけだ・・・」

強盗の能力が分かった事により、何故、強盗は自分のテレポートの位置が特定できたのか気づいた。

（あの殿方から発せられた微弱な振動は、ある範囲内に入った物にあたる事により、跳ね返ってきた振動を受け取ること、わたくしの位置が特定できたと・・・それなら納得がいきますわ・・・）

「俺が言いたかった事は、俺とお前じゃ相性が最悪だってことだよ！！」

そのことは、黒子もわかっていた。

（相手が悪いとはいえ・・・油断をしていましたの・・・）

「おい！テメーらさっさと逃げるぞ！」

先ほどまで倒れていた二人が立ち上がり、

「クソッ・・・こんなガキにやられるとは・・・」

「このガキ殺していい？」

立ち上がった二人の強盗は、黒子を見ながら言った。

「テメーら、さっさと行かないとアンチスキルが来る・・・」

ドカツ!!

発火能力を持った強盗が黒子の腹を蹴りあげた。

「ぐあっっ!!」

黒子の口からは、汚物ではなく血が流れていた。

その姿を近くで見えていた内人の中で何かがブチ切れた。

（あの黒子って子、まだ見た感じ中学生だろ・・・いい年した男が寄ってたかって、何してんだよ!）

そのような考えがをしている間に、何かに刈られたように走りだす内人。

気づいた時には黒子を蹴り上げた強盗の顔面に蹴りを入れていた。

「ぐっはっ!!」

強盗は鼻血を出しコンクリートの上でのた打ち回る。

その姿を見た念動能力を持つ強盗が、

「おい! ガキが何してくれてんだよ!!」

その言葉を聞いてさらに怒りがこみ上げ、

「そのガキに寄ってたかって何してんだよ!!」

そう、それは無意識の間に起きていた。

なぜだか内人の手の平に炎が現れる。

この事に関しては、内人自身も驚いていた。

しかし驚いている暇など無い。

今はただ、目の前にいる強盗達から黒子を守る事しか考えていなかった。

そんな中で黒子が口を開き、

「貴方・・・何をしたいらっしゃいますの・・・？早くここから逃げてください・・・。」

「んな事できるかよ！！！」

「！？・・・何を言っておりますの？・・・今さっき会ったばかりの赤の他人ですよ・・・」

「確かに、お前にとって俺はただの赤の他人かもしれねえ・・・だが俺は、そうは思っていない！」

「！？」

黒子は、驚いていた。

しかし内人は、それを無視して話を続ける。

「俺はこの学園都市来て、初めてに人に親切にしてもらった・・・」

「・・・それは、わたくしがジャッジメントだから・・・」

「いいや、それは違うね！俺は、道を尋ねただけなのにお前・・・じゃなくて黒子は、一緒に本まで探してくれた！それがどんなに嬉しかった事か・・・」

「・・・・・・」

黒子は、黙って内人の話を聞くことにした。

「嬉しかった・・・本当に嬉しかった！そんな黒子が赤の他人？そんな訳があるはずねえーだろ！！！！黒子は、俺の大切な友達だ！！！！」

いつしか黒子は、涙を流して内人の話を聞いていた。

「俺の・・・俺の大切な友達に手を出した奴は、絶対に許さねー！！！！」

話している途中でも内人の頭の中では、一つの言葉がループしていた、

(ZERO)

よくよく考えたら、手から出ている炎は、強盗の発火能力と似ていた。

とは言っても、明らかに内人の炎のほうが弱い。
それでもある事に気がついた。

(俺の「覚える能力」は、見た能力を真似することができなのか・・・それなら！！)

少し先には、黒子を襲った鉄パイプがあったので念動能力を見よう見真似で使って見ることにした。

フワァ

鉄パイプが宙に浮いた。

その鉄パイプを自分の手に引き寄せるように意識すると、なんとその鉄パイプは、内人の手に引き寄せられ、手の中に納まった。それを見た強盗達は焦っていた。

「なんだ・・・コイツ・・・」

「能力を二つ使いやがった・・・」

しかしただ一人それを見ても笑っている奴がいた。

「くっくっく・・・面白い・・・オイ!! お前らソイツを殺しちゃえ!!!!」

その言葉に強盗の二人は、

「仕方ねーな」

「さっさと、終わらせるぞ!」

二人は、内人を襲いかかったが目の前の内人を見て動きが止まる、

「「な!?!」」

驚くのも無理はない。内人が持っていた鉄パイプには、炎が纏っていた。

動きが止まっている強盗に、内人は鉄パイプを構え襲いかかる。

「ううおおおおー！！！！」

発火能力の強盗は、その声に気を取られてる隙に、内人は、強盗の頭上に鉄パイプを叩きおとす。

「ぐおっ！！」

その一撃で発火能力者は倒れる。

「クソっ！！」

念動能力の強盗は腕を左右に開き、何処からともなく、いくつもの鉄パイプが出てきた。

そのいくつもの鉄パイプは、内人に襲いかかる。
しかし、

「なめるんじゃねー！！！！」

「何！？」

内人は、鉄パイプを見事な剣さばきで一つ一つ鉄パイプを受け流していく。

「お、おい！近寄るんじゃねー！！！！ぐああ！！！！」

強盗のわき腹に鉄パイプがえぐり込む。
そして二人目の強盗が倒れた。

「やるねーお前。しかしそれが俺に通じるかな！！！」

最後の強盗が襲いかかってくる。

それに真っ向から迎え撃つ体制をとる内人だが、

ゴンッ！！

強盗から衝撃波のような物が飛ばされる。待ち構えていた内人に襲い掛かった。

ガッン！！

なんとか内人は、鉄パイプでそれを受け止めた。

「おっと？少し威力が弱かったか？」

言葉を言い終えると二撃目を放たれた。
その時、

「覚えた」

内人は、言った直後に同じ物が放つ。

ゴン！！

互いの衝撃波は、相殺された。その隙を内人は、見過ごさなかった。
内人は、念動能力で落ちている鉄パイプを強盗にむかって投げ、発

火能力で鉄パイプに炎をまわせ、さらに衝撃波を使い、鉄パイプのスピード上げる。
それに気づいた強盗も衝撃波を放つが、互いに放った衝撃波により相殺される。

だが念動能力で動いている鉄パイプを止める事はできなかった。
そして：

能力の使い方（後書き）

変な終わ리카たですが「そして…」の続きは、次回書くつもりです。
めっちゃアンチスキル来るのが遅いです（笑

それは、気にしない方向で：

後、白井黒子ができました。

まあ黒子にフラッグが立つかどうかは、まだわかりません。

それでは、次回もよろしくお願いします！

病院（前書き）

何回も言いますが誤字、脱字があると思いますが気にしないで下さい。

それでは、読んでやって下さい。

病院

暖かい…

ココは一体何処なんだろう…？

何かに手が握られている…

でも嫌じゃない…

むしろ、気持ちいいか…も…

ゆっくりだが、目が開いた。

最初のうちは視界がぼやけ、周りの音がうまく聞き取れなかったが、徐々に回復していく。

その中で、

「お…い…く…ろ…こ…」

ちゃんと聞き取る事は、出来なかったが、自分の名前が呼ばれていると気が付いた。

「誰…ですの……？」

おぼつかない声で言ってみた。

そして起き上がった時、完全に目が覚めた。
なぜなら、

（な、な、何故ですの！？何故目の前に貴方が…）

目の前には、鬼龍内人が居たからだ。

しかも顔と顔の間は、5センチもなかった。

その事で、顔が真っ赤になった黒子を心配そうに見つめる内人が、

「おい！大丈夫か？でも顔が真っ赤だし…熱でもあるのか？」

そう言っただけで内人は、自分のおでこを黒子のおでこにくっつけた。

「熱いな…。本当に大丈夫か？」

「な、な、何をしていらっしやいますの？？？」

その言葉を聞いて、キョトンとしながら、

「熱があるかな…って思っただけ」

内人は、まるで当然の事をした時の顔をしていた。

「ん…やっぱり少し熱いな…」

その一方で黒子は、

（顔が…顔が…顔が近いですわ…！！！！）

そしてまた、顔が赤くなる。

さすがにマズいと思い、内人の肩に手を置き、そのまま腕を伸ばし距離をとる。

その行動に

「イヤ…だったか…？？」

その時の内人の顔は、黒子にとって衝撃的なものだった。

黒子は、まさか内人がこんな顔をするのか？と思ってしまふほど悲

しい顔をしていた。

「イヤ…別にそういう訳では、決してないのですわ…」

「そうか…それならいいけど…」

内人も内人で

（えっ！？俺何してたの？あんな事されたら普通、誰でも嫌がるよな！？）

完全に自分のしたことに後悔をしていた。

「……ごめん……」

「！？だから、別にいいと言ったはずですよ！…聞きたい事があるのですが、いくつか聞いてもよろしいですか？」

「ああ。答えれる範囲なら」

「それでは、聞きますわよ。強盗は、どうなりましたの？」

「強盗なら全員、アンチスキルに捕まったぞ」

その言葉を聞いた黒子は、安心したが新たな疑問が生まれた。

「誰が一体、強盗を…」

「俺がやったよ」

「そうでしたか…一応聞いておきますが、貴方、一体levelはいくつですか？」

「俺のlevel? levelなら1だぞ」

「なっ!? それは、本当ですか？」

黒子は、驚いていた。

level4の自分が負けた相手をまさか、level1が倒すなどそんなことは、普通に考えたら有り得ないことだ。

「能力は、一体何ですか？」

「覚える能力だ」

「覚える…能力？」

「ああそうだ。簡単に言うとZEROだ」

「ZERO……」

いくら常盤台に通っている黒子でも、聞いた事のない能力だった。

「名前の通り、相手の能力を真似する事ができる能力だ」

「そんな能力…聞いた事ありませんわ…」

「だろうな。恐らくこの能力を持っているのは、俺だけだと思う」

「…わかりましたわ。それと…えーと…その…さっきほどは、あり」

がとうございましたわ」

はっきり言うと、内人の能力には、全く納得していなかった。
しかし最後の言葉は、自分の心にあった事を言っただけだった。

「そんなに誉められるほどの事じゃないよ。ただ人助けをただけだ…」

「いいえ！そんな事、ありませんわ！！ただ人助けで人の命を救うなんて、そんなに素晴らしい事はありませんわ」

「そうなのかな…？」

「そうですわ！だから自分のやった事に、誇りを持って下さい！！」

黒子は、本当の事を言った。
内心では

（あゝあ、まさにジャッジメントの鏡ですの）

などと思っていた。

「ありがとな黒子！嬉しかったぜ！おおっと、もうこんな時間か…
悪いが俺は、帰らせてもらおうぞ？」

「あっ！ちょっと待って下さいますか？」

その言葉に驚いて

「！?…どうした？」

「たしか貴方、まだ学園都市に来て間もないと言っておりましたよね？」

「たしかに、そうだが…それがどうした？」

「それですの。わたくしと、メールアドレスを交換してくれませんか？」

「ん！？…別にいいけど…どうしてだ？」

「えーと…まだ学園都市でわからない事があるとおもいますの。その時に、ジャッジメントであるわたくしに聞けば、分かる範囲で、お答えしますわ」

「えーと、ようにわからない事があれば黒子に連絡すると…？」

「そうですわ」

内人は、それに納得して

「ああ、わかった。交換するか」

その瞬間、黒子は心の中でガッツポーズをしていた。

（やりましたわよ、わたくし！ん…一体何を考えていますの？わたくしには、お姉様という心に決めた人がいるに！！！！）

「それじゃ黒子、俺は…」

「待って下さいますの!」

「今度は、どうした?」

「あの…えっと…そうですわね…その貴方の事を、今度から下の名前で呼んでも…いいですか?」

「ん? そんなことか。全然いいぞ」

黒子は、その事に嬉しくなり、さっそく呼んでみる事にした。

「そ、それじゃいきますわよ………な、な、ない、ないと、内人様
!」

「おう! どうした?」

「いや……ただ呼んでみただけですの」

「あっ!! 時間がヤバイ! 明日から学校があるから帰らしてもら
ぜ」

「わかりましたわ…それでわ」

「おう! また今度な!」

そして内人は、病室から出た。

病院（後書き）

おそらくフラッグは……たったかな……？

自分でもわかりません。

本当は、この後に何を書いていいか全く考えてないです。ですが、なるべく早く投稿したいと思っています。

病院2（前書き）

今回は前回の続きです。

また誤字、脱字が……………。

→の次回から書きません。

それでは、続きです。

病院 2

黒子と別れ部屋を出ようとした。
その時だった。

ドン！！

何かに当たり内人は尻餅をつく。
当たった先を見ると一人の女の子がいた。

「痛ったゝい！アンタ一体何すんのよ！？」

その女の子も同じく尻餅をついていた。
しかもスカートがめくれてれていたので、中が丸見えだった。

（えっ！？スカートめくれてれるよ！！……見ちゃダメだ……見ちゃダメだぞ俺……でも少しくらいなら……、よし負けた）

そして少し見てみる。

（つつ！？………何だよ……短パンはいてんじゃん……）

「ちょっと……アンタ……今一体何処を見てた？正直に言ったら電撃少し弱めるから……」

ヤバイ！
確かに、自分の理性がもっとしっかりしてれば……などと思っていたが、今はそれ以上に感じる物があった。

(俺……俺って死ぬのか？理性が崩れた瞬間に死亡フラッグが立ったのか……？)

言葉よりも早く土下座の姿勢になる。

それは、本能というものだ。

「どうもスイマセンでしたー！！！」

もはや人間の常識を遥かに越えるスピードで頭を下げる。

「わかってるならさっさと言いなさいよ！でも電撃の刑を逃れる事は出来ないわよ………」

バシッ！！

「痛って~~~~~!？」

体に電流が流れる。

(うおっ!?!……ちよつとこれはヤバいかも……)

だが、

(覚えた……けどダメだ…、コイツもlevel4以上か?)

上手く能力が覚えられないのも当たり前だ。

覚える能力は、level4以上の能力を覚えるのは難しい。

それに気付いたのは、強盗と戦い終わった後だった。

level3以下の能力なら一応見るだけで覚える事は可能だが、本来の能力より劣ってしまう。

しかし、直接その能力を自分の体で受ける事によって、本来の能力と同じ力を出す事が出来る。

しかし黒子のlevelは、4だった。

黒子のレポートを見た事はあるのだが、どうも発動することが出来なかった。

なら覚える方法は一つしかない。

それは、その能力を何回も受けるしかない。

さすがにlevel4以上だと、一回だけじゃ本来の能力よりかなり弱い力になってしまう。

しかし電気の能力を手に入れた事により、電気によるダメージを少しだが減らす事が出来た。

おかげで気絶しないですんだ。

「ちょっとお姉様！？何をしていますの！？」

黒子が叫んだ。

一方、女の子は驚いていた。

気絶させるつもりで電流を流したのに、電流を受けた本人は意識があっただ。

「何でアンタ気絶してないのよ……まさかアンタも電撃使いの能力者？だったらさっきより強い電撃で……」

そうして女の子は構える。

さすがの内人もこれ以上電撃に耐えるのは無理そうだった。

「お姉様！やめて下さい！」

黒子がレポートで内人の目の前に立っていた。

「たとえば内人様が破廉恥な事をしたとはいえ、少しやり過ぎですわ

！
」

「ちょっと、どきなさいよ黒子！」

「いいえ、どきませんわ！命の恩人が目の前で怪我をするのを黙っておけませんの！」

その時だった

「うるさいっ！！！！」

「「なっ！？」」

黒子と女の子は、動きが止まる。その声の主は、ナースだった。

「あなた達、周りの人達に迷惑がかかるから静かにしてくれませんか！？」

内人は思った

（いや……アンタも相当声がデカイけどね……って言ったら今日が命日になりそうだ……）

突然のナースの登場により二人の言い争いも静まった。

「仕方ないわ……黒子に免じて許して上げる。って言うかアンタ誰よ！？」

そう、内人とその女の子はもちろん初対面である。

「俺か？俺は今月から学園都市の高校に転入してきたものだけど…
…」

「いや……名前を聞いてるんだけど？」

「名前？名前なら鬼龍内人っていうんだけど…アンタは何て言うんだ？」

「アンタって……私にはちゃんと御坂美琴って名前があるんだからね！」

「今知ったし……んじゃ美琴でいいな？」

その言葉に美琴の顔が赤くなる。

「あ、アンタね！人をいきなり下の名前で呼ぶって、どんだけデリカシーが無いのよ！」

「おい、何で美琴は俺の事、アンタって言うんだよ？」

「べ、別にいいでしょ！私は、特別なのよ！特別！」

「意味わかんね…」

内人はこの時知らなかった。

御坂美琴との出会いがこの後、ある事件に巻き込まれる事になるとは…

病院2（後書き）

どうでした？

出来れば感想を頼みます。

次回も今回の続きです。

それではまた！

病院3（前書き）

短めです。

最近かなり部活とかなんやらで忙しいです。
それでは、今回もよろしくお願いします。

病院3

「何でアンタは黒子の病室に居るのよ？」

「なんでって……」

内人は、銀行でのことを美琴に話した。

「アンタが黒子を助けてくれたのね、まあ私からも一応礼を言うわ」

「んや…普通の事をしただけだ、困っている人がいたら助ける！人として当然だろ」

美琴は、フツと思う。

（アイツに似てるわね）

しかし美琴は信じられないことがあった。

常識的に考えても、いくら相手が三人とはいえ、level3がlevel4を倒すのはほぼ奇跡に近い事である。それだけlevel4とlevel3には差があるのだ。

「まさか黒子が負けるなんてね」

「仕方ないですよ！！たまたま相手が悪かっただけで…」

「たしかに相手が悪かったな」

取り合えず黒子が困っていたのでフォローを試してみる。
さすがの美琴もその事を信じるしかなかった。

「黒子と美琴ってどういう関係なの？」

「私と黒子は同じ学校で同じ寮にいる、まあ世間でいう親友みたいなものよ」

「あら！お姉様！そんなふうに思ってたくれましたの！？わたくし嬉しくて死にそうですわ！」

「あーもー！！言葉を選択ミスしたわ！」

「お姉様〜〜！」

そうして黒子は美琴の腕に張り付く。そんなやり取りを面白いそうに見る内人だったが…

「ん！？……ああああ………」

ガク……

ただ今の時間は9時。

今からご飯を食べ、風呂に入り、明日からの学校の支度をしなければならぬ。

（無理だ……買い物しないと食料ないし……何！？財布何処かで落とした！？何で……何処で……絶対無理……無理……無理無理無理ムリ〜〜〜〜！！）

今から家に帰る暇はない。
内人は最後の決断をとる。

（夜ご飯抜きか……）

「ど、どうしたの？」

「ご飯……ご飯……ご飯……」

「ご飯？それなら一緒にそこら辺で食べる？私もまだ食べてないし……」

「ありがたいお言葉ですが……財布を何処かで落としたみたいで……」

「別に私の奢りでいいわよ」

その言葉を聞いて内人は顔を上げて

「マシで………？」

「お礼よお礼」

内人の顔が笑顔に戻り、美琴の手を握りしめて

「美琴、美琴様……ありがとうございます」

「それならわたくしも行きますわ……」

いきなり黒子が横から出て来てそう言ったが

「黒子、アンタは今日は休んでなさい」

美琴が黒子を気遣い言ったが

「しかし……わたくしも……」

「黒子…今日は休んどけ」

内人にも止められたので渋々黒子は

「仕方ありませんわ……」

黒子が諦めた所で

「それじゃまた明日ね」

「ちゃんと体を休めろめろよ!」

「わかりましたわ……それではお気をつけて…」

やけに黒子のテンションが下がっていたが二人は病室を出た。

病院3（後書き）

黒子……良いですね。

忙しいとか言いながら、友達から原作借りて時間があると読んでいます。

次回作も読んでくれると嬉しいです。

ファミレス（前書き）

連続投稿になります。

それでは後書きで会いましょう。

ファミレス

病院から歩いて少しの所にあったファミレスに入った。

「ふう〜やっぱファミレスは涼しいわね」

「いや……今さっき病室にいただろ……」

「う、うるさいわね!! 周りの空気で言っただけよ!!」

「わかったよ……疲れたから静かにしろよ」

その言葉に美琴は笑みを浮かべる。

まるで悪魔のような顔に見えた。

内人を休ませない、と言わんばかりの顔だった。

「今日は聞きたい事が色々あるのよ」

「ん? 何を聞きたいわけ?」

「アンタ、levelいくつ?」

やはりか……

聞かれるとはわかっていたが、説明するのが難しいのであまり話したくなかった。

ピンポン

取りあえず店員を呼んで注文をすることにした。

「煮込みハンバーグとライス大でお願いします」

「アンタ！話をそらさないで！っつ私は、ナポリタンで」

話題を変更しようとするが

「で？アンタのlevelは何なの？」

「levelだよ」

「levelですってっ！」

美琴は目を丸くして内人を見ていた。

「それで一体能力は何なのよ？」

「覚える能力」

「聞いた事ない能力ね」

「学園都市で俺しか持っていない能力……多分」

リアルに疲れている内人は適当に返事をしていた。

「それって最強じゃないの……」

「何で？」

「もし相手の能力と同じ能力が仮にいくつも同時に使えたら……」

「それは考えすぎだ。level 4以上はなかなか覚えられない。そうなるlevel 5の能力は無理かもな」

簡単に能力の説明を試みた。

なるほど……

などと美琴は何かを考えてた。

内人も美琴に質問を試みる。

「美琴って何処の中学行ってた？」

本当に何となく聞いてみた。

すると思ってもよらない答えが返ってきた。

「常盤台よ」

「常盤台ね、ん？アレ？常盤台？あの？………

………常盤台だって………！?!?!?!」

「うるさいわね！ファミレスよ！場所を考えて声を出しなさい！」

「スイマセン……以後気をつけます……」

美琴が常盤台！？あのお嬢様の行くアレだよな……

学園都市の外でも相当有名な学校である。

不意に頭の中に何かがよぎる。

（アレ……確か常盤台には電撃使いの能力者にlevel 5がいたような……もしかして美琴が？……聞いてみるか）

「あのさくもしかして美琴ってlevel5だったりする？」

「そうよ。私が学園都市で七人しかいないlevel5よ」

「へえくそうなんだく」

学園都市に来たばかりの内人には、level5が七人しかいない事に驚いていた。

学園都市には230万人もいるのに何故、七人しかいないのかが謎だった。

「level5になるのって難しい事なのか？」

「……………アンタlevel5舐めてるわね」

「うくん…そういう訳ではないんだけど…………話しによるとカリキュラムつつうのをやればlevel1上がるんだろ？」

「アンタもやってるでしょ？」

「まだやってないな」

「やってない？」

その言葉は普通では考えられない事だった。
学園都市の生徒は必ずカリキュラムを行う必要がある。

「俺、まだ学園都市に来たばかりなんだ」

「来たばかりって……………アンタ、今何月だと思ってるの!!」

たしかに、今は6月の初めだった。

この時期に学園都市に転校なんてまずありえない事だった。

「家の事情でね」

「よく学園都市側も受け入れたわね……」

「何でだろうなくおっと、料理がきた」

そのまま内人は料理に被りついた。

美琴は美琴で料理が来て食べている。

「ふう〜食べ終わったと」

「私も食べ終わったわ」

「俺はもう帰るわ」

「待って！まだ話しが…」

「また今度な…明日学校もあるし」

「わかったわ……今度会った時は覚悟しておきなさい！」

「どんな覚悟だよ…」

こうして二人はファミレスを出た。

内人は美琴を寮まで送っていいこうと思ったが、まだよく学園都市がわからない事を理由に美琴に断られた。

二人は途中で別れそれぞれの寮に戻った。

ファミレス（後書き）

ふう〜一日に二回の投稿はキツイです。

ですが、次回作も頑張ります！！

感想をもらえると次回作も頑張れますので、よろしくお願いします。

高校生活初日

まずい……非常にまずい……

今現在の時刻は…8時。

学校には8時30分に着かないと遅刻になる。

(目覚ましセットするの忘れた……不幸だ……)

急がないと相当まずい。

学校生活の初日に遅刻なんて洒落にならない。

「くそっ！こうなったら朝飯抜きか！」

急いで制服に着替えて家を出る。

ドアを開け、急いで外に出て階段を駆け降りようとした。
その時だった。

「このままじゃ遅刻だ！！不幸だー！！！！」

横から同じ制服を着た青年が現れた。

その制服をみた内人は

「アレ……同じ学校ですよね？」

「同じ寮から出てきたならそうなるだろ」

「確かに……」

「納得してないで、さっさと行かないと遅刻になるぞ!!」

「ああ、わかった!」

二人は走り始めた。

「転校してきたのか?こんな時期に珍しいな」

「色々あってな」

今月に入って転校をしてきた事を青年に教える。

「俺の名前は上条当麻、よろしくな」

「いや、こちらこそよろしくな!そんなでもって俺の名前が鬼龍内人だ」

簡単な自己紹介を済ませた時には、なんとか学校に着いていた。
二人は急いで上履きに履きかえる。

「俺は転入生だから職員室に行くから」

「わかった。同じクラスだいいいな」

そう言葉を交わすと、二人は別々の廊下を歩いて行く。

「カミやーん!!」

教室に入った瞬間に青髪ピアスこと青ピが

「転校生がウチのクラスに〜!!」

意味のわからない事を叫びながら抱き着いてくる。

「お、おい、離れろ青ピ!!」

「この時期に転校生なんて……絶対に女の子やね……しかもベツピンさんの!!」

何を根拠に言ってるのかよくわからないが

(転校生……あ、アイツのことか)

「悪いな青ピ!それ男ですよ……」

「んな!?!嘘……嘘や……嘘って言うてくれ〜カミやん!!」

「その転校生と朝会ったし」

「……」

青髪ピアスは倒れた。

いつもならここに土御門元春もいるはずなのだが、彼は席に座って考え事をしていた。

「おい、土御門？大丈夫か？」

「カミヤんか……いや、ちょっと考え事をしてただけにゃー」

そんな事を言いながらも土御門は

（おかしい……この時期に転校生なんて……絶対にアイツが絡んでるはずだ……）

ガラガラ

「みなさーん！席に着いて下さーい！」

「「「はーい」「」」」

教室に入って来たのは、小学生……ではなく、このクラスの担任の小萌先生だ。

「みんなに、ビックなビックなお知らせがありまーす！」

「……………」

静かに息を呑むクラス一同。

「今日から新しくみんなと一緒に学校生活を送る鬼龍内人くんです」

ガラガラ

「んな！？……………」

青髪ピアスは、またも倒れた。

その時、クラスの女子は喜びで目を輝かせていた。

「今日からこの学校に転校してきました、鬼龍内人と言います」

その言葉を聞いて男子生徒はあまりにもカッコイイ名前と顔に嫉妬していた。

（（（旗男決定だな！！！！）））

上条以外の男子は、内人を睨む。

そんなこんなで内人は無事に自己紹介を終える。

席は窓側の一番後ろ。

そして授業が始まる。

あっという間に昼休みになる。

昼は学校の売店で売っていたパンを食べている。

周りには、クラスメイトがいた。

今内人は質問責めを喰らっていた。

「内人君は何処から来たの？」

「能力は一体何なの？」

「好きなアーティストっている？」

ほとんどが女子だ。

それに律儀に答える内人はどんどん人気が上がる。

しかし、女子に好かれるほど男子からの目線が痛くなる。

「おい、鬼龍！」

「ん？どうした当麻？」

「今日一緒に帰らないか？」

「おう、いいぞ！」

当麻と帰る約束をすると昼休みが終わる。

「おい！鬼龍帰るぞ」

当麻に呼ばれて急いで駆け付けると、そこには青髪と金髪でサングラスをかけた奴がいた。

「えーとっ……どちら様で……」

「サングラスをかけてるのが土御門元春」

「よろしくにあー鬼龍ちゃん」

「き、鬼龍ちゃん？」

「そんでもってこっちが……青髪ピアスこと青ピ」

「よろしくやんな鬼龍ちゃん」

「え、う、うん……よろしく」

まさかのニックネームに驚いてる内人だったが

「よし帰るか」

「そうだな」

こうして高校生活初日が終わった。

高校生活初日（後書き）

どうでしたか？

いやゝ喋り方が難しいです。

それでは次回作も頑張るので応援よろしくお願いします！！

ジャッジメント

高校生活初日から三日たったある日の事だった。
放課後、上条当麻達と寮に帰る途中だった。
携帯のバイブ音が鳴った。
そのメールは黒子からだった。

『今、暇ですか？』

……なんとまあ短いメールだろう。
取りあえず内人は

『暇だ』

と、短いメールでお答えした。
そしてまた、メールがくる。

『4時に〇〇公園に来て下さい』

との事だった。

先程も言ったが、内人は暇だ。
そうなると答えは一つ

『了解した』

そうメールして今の時間を確認すると

(3時か……………)

黒子とのメールをし終えた時には、すでに寮に着いていた。

（着替えてから行くか……………）

私服に着替えて、部屋でテレビを見ながら時間を潰した。

ある程度の時間が経ったので部屋を出た。

公園に向かうと既に黒子はいた。

（早いな……………15分前だぞ……………）

割と寮を早く出たつもりだったが、黒子の方が早く着いていた。

「黒子！」

そう黒子に声をかけるとピクつと体を動かした。

「久しぶりですわね内人様」

「ああ、そうだな」

何故ここに呼びだされたか黒子に聞くと

「え、え、えーと…その今日はジャッジメントとしてのパトロールがありますの。その帰り、一緒にお食事でもいかがですか？」

「わかった」

（いや…………黒子も常盤台だよな…………行くレストランとかも値段が高
いんじゃないか？）

今内人の家計は火の車だった。

なんせ学園都市に来てからは、コンビニで弁当を買う事が多かった。そうすると自然に食費も上がる。

そんな中、お嬢様学校の子とレストランで食事？今の内人では不可能に近い事だった。

「悪い！食事つつても、あんまり高い所は行けないぞ俺」

「今日はわたくしの奢りですわ」

「はい？」

「だから、今日はわたくしが奢りますと……」

「何ゆえ、そのような事に……」

「この前、わたくしを助けてもらったお礼ですわ」

「それなら美琴に……」

「お姉様はお姉様、わたくしはわたくしですわよ」

「あ、はい、そうですか……」

黒子の迫力に圧倒され、レストランに行くことを約束する。それから黒子と内人は一緒にパトロールに行く事になった。

「ここから先は二手に別れてパトロールしますわよ」

「ああ、わかった」

そうして二人はそれぞれの道に行く。

（つか、俺ジャッジメントの腕章してないけど大丈夫か？）

そんな心配をしながらも大通りの道を歩いて行く。道の途中にはいくつもの路地裏がある。

内人は一つの路地裏に目がいく。

（あの子……何やってんだろ……）

頭に花飾りをつけた女の子が路地裏に入って行く。

その異様な光景に刈られ、内人は女の子の跡をつける。すると

「おい！調子こいてんじゃねーぞ！！」

男の声が響く。

それに怯えながらも

「わ、わ、私はジャッジメントです。何回も言うようですが未成年の喫煙は禁止……キャ！！」

女の子は男に壁に叩きつかれる。

「うるせーぞガキ!! 涙目で言われても説得力ねーぞ!!」

二人の男に責められ、その場で崩れそうになる。

一人の男が女の子の髪を花飾りと一緒に引っ張る。

「は？お前、俺達に逆らってただで済むと思うか？」

「いっ痛い……花飾りは止めて……」

「花飾りは止めて？……んじゃコッチはいいのかよ？」

男は女の子の胸を触る。

「ひゃ!？」

「何だ？パット触ってるみたいだな……」

「まあいい、たっぷり可愛がってやるよ」

その言葉に女の子はついに涙する。

「や、やだ! 誰か、誰か助けて!!」

「おい!! お前らその子から離れろ!!」

内人が叫んだ。

ジャッジメント（後書き）

文章が雑です。

マジでサーセン……………

次回は戦闘になると思います。

次回作も読んでくれると嬉しいです。

ジャッジメント2

「あ？誰だお前？」

「嫌がつてるだろ！！早くその手を離せ！！」

「くそっ！面倒なことになった！やっちなえ！」

路地裏だというのに風が吹く。

その風で内人は、後ろにとばされる。

おそらく、男は路地裏の地形をいかして、風を一点に流し続ける事で強い風を流す。

（風の強さ的にはlevel4だが………実際はlevel3だな）

その風を全身に受けた時に、体に衝撃が走る。

そして一言

「覚えた」

そう言うのと内人は、男と同様に風を起こす。

「ん？お前も風的能力者か」

「バーカ！風的能力なんかじゃねーよ」

笑いながら内人は言った。

「俺の能力こんなもんじゃない」

「何だと!？」

念動能力を使い、落ちている物を次々と浮かばせる。
それも全て金属の物を

「お、お前の能力は一体!？」

「考えるだけ無駄だと思うけど」

その瞬間

ボォ

浮かばせた物が炎に包まれる。
そして右手を前にかざす。
内人は男に言う。

「最後だ。その子を離せ」

「ざけんなー!!!」

男は風を出して応戦するが、同じ風によって風は相殺される。

ズドーン!!!

内人は振動の能力を使い、金属の物に衝撃を当てて男の方に吹き飛ばす。

金属は振動しやすい物だという性質を使い、かなり早いスピードで飛んでいく。

それは風の壁すら突き破る。

それを止める事が出来ない男は叫ぶ。

「止まれ！！止まれっつてんだろ！！！」

どんなに叫んでもスピードは遅くならない。

ドン！ガン！バコン！

金属が男にいくつも当たる音がする。

ジャッジメント2（後書き）

短めですね。

次回もこれの続きです。

感想なども書いてもらえると頑張れますので、よろしくお願いします。

ジャッジメント3

男はその場で気絶し倒れる。

「何やられてんだよ!! クソっ!!」

もう一人の男は、女の子から手を放し、こちらに向かってくる。男の手には拳が握られている。

そこに内人は容赦なく風を叩きつける。男はそれに全く動じない。風を切り裂き内人に殴りかかる。

グシャ

鈍い音が鳴り、内人は大通りに飛ばされる。

（痛って〜! 何で風が効かないんだ! 一体何の能力を使いやがった?）

おそらく男は”何かの能力”を使ったのだが、それを特定する事が出来ない。

能力を覚えても、その能力が一体何の能力か知る必要がある。

「ハア……ハア……」

一発殴られただけで意識が飛びそうになった。

能力が分からない今、内人はその能力を発動させる事が出来ない。それが覚える能力の欠点だ。

その事を知らない男はご丁寧なことに

「俺の能力は肉体強化だ、悪いが風に逆らって動くななんて訳ないんだよ!」

（コイツ自分から能力の事を言いやがった！手の内を明かすなんて馬鹿だな）

それから内人のとった行動は簡単だ。

両手に炎を出して、風的能力でいっきに炎を大きくする。

そのまま男に殴りかかる。

炎によって内人の姿が見えない男は、ひたすらその攻撃に耐えるしかない。

運よくその攻撃が男の顔面に連続で当たり、倒れそうになった所にアップラーを食らわす。

「ウガっ!？」

そのまま男は気絶する。

なんとか二人の男を倒す事に成功した内人は、黒子に連絡をする。

「おい、黒子か？」

『どうされましたの？』

「今、男に襲われてる女の子を助けたんだけど……どうすればいい？」

『そこから動かないで下さい内人様』

「ああ、わかった」

連絡をし終えて携帯をしまうと

バサッ

女の子に抱き着かれる。

「ちょ、ちょっと何してるのですか!？」

突然の事に焦る内人だったが

「こ、怖かった……」

内人の胸に頭を埋める女の子がそう言った時に、内人は自然に女の子を抱き寄せていた。

「大丈夫……もう大丈夫だから……」

「うっ、うっ……」

しばらく女の子を抱きしめていると

「内人様、大丈夫でしたか？」

大通りから黒子が走って来るのが見えた。

「お怪我はありません……んな!？」

黒子の顔が固まる。

その目は二人に向けられる。

「何をしていらっしゃいますの内人様？」

「あの…黒子さん？何か誤解されていませんか？これは違うんですよ！そのえくと…抱き着いて来たんですよ」

「その言葉…信じててもよろしいのですか…？」

「ハイ！もちろんです！」

「まあ後でじっくりと話してもらいますわよ」

「そんな〜」

「そちらの女の方は…初春ではありませんか！？」

「アレ…知り合いなの？」

「ええ、同じジャッジメントですわ」

「す、すいません！いきなり抱き着いちゃて…」

女の子が頭を下げてきたので内人は慌てて

「そんなに頭を下げなくてもいいよ」

「そうですわよ初春。わたくしと内人様は今、パトロール中でしたから」

「そうでしたか…えーと自己紹介がまだでしたね。私の名前は初春飾利です」

「俺の名前は鬼龍内人だ、よろしく」

「こちらこそよろしく願います……ってアレ？ ジャッジメントの腕章をしていないみたいですが……」

あたり前の質問だ。

ジャッジメントでもない人がパトロールをする事は、めったにないことだ。

「いや……俺はジャッジメントじゃないんだ」

「では何故パトロールをして……」

「わたくしが内人様をパトロールに誘いましたの」

「そうなんですか」

「それより、コイツらどうする？」

内人は倒れている二人を指でさす。

「問題はありませんわ、わたくしの方からアンチスキルに連絡をしましたので」

「それは助かる」

「それで……その……これから食事にでも……」

「うん、そうだな」

今の時間は6時になっている。

黒子との約束通りにレストランに行こうとした時に

「あの……お二人はどんな関係で……？」

初春が聞いてくる。

「どんな関係って……うーん……こんな所で話すのもアレだから一緒にレストランに行く？無論、黒子の奢りだが？」

「えっ！？わたくしですか！？」

そこに初春が上目遣いで黒子に言う

「ダメ……ですか……？」

「うっ！……仕方ありませんわ……」

こうして三人でレストランに行く事になった。

ジャッジメント3 (後書き)

文章雑でサーセン……

投稿するのが遅れてくると思います。

それでも頑張りますのでよろしくお願いします！

魔術と科学

初春を助けてから一ヶ月がたった。

その間、黒子に何度もパトロールに誘われ、たまに能力を使って来る奴などはいたが、そのたびに内人は能力を覚えてその場で倒す。これの繰り返しだ。

もちろん相手はlevel 4以上の能力者が居なかったので、能力を覚えるのに苦労はしなかった。

そして今日は7月20日、一学期が終わり、夏休みに入った。

「暑い……何で停電してんだよ!？」

朝、ブレーカーが落ちている事に気づいてブレーカーの電源を入れるのだが、エアコンがつかない、テレビが見れない、冷蔵庫が冷えてない、完全な停電が起こっていた。

「は……暑い……死にそうだ……」

このまま部屋に居る事は自殺行為に等しいため、外に出る事にした。

「当麻でも誘って……ってアイツ、補修あるじゃん!!」

最後の砦が崩壊した時だった。

今の内人は完全な暇人である。

(学園都市でも歩き回るか……暑いけど……)

今だに学園都市の事がよくわからないので、散策をする事にした。

（流石にここら辺はパトロールした事なかったな……）

歩き回ってみると知らない場所がたくさんあった。

昼ご飯をファーストフード店ですませて帰ろうとした時

「ん？……こんな所に教会があったんだ」

学園都市にも宗教があるんだな、と感心をしていた時だった。

ドサッ！

その音がする方向へ向かうと、一人の修道服を着ている女の子が倒れていた。

内人は急いで駆け寄ると

「おい！大丈夫か？」

その女の子は顔を上げて

「大丈夫……ちょっと転んだだけだから」

「よいしょっと」

内人は女の子の手をとり立ち上がらせると

「ありがとう、でも行かなくちゃ……」

「何処にだ？」

「忘れ物したから……」

「そうか、気をつけてな」

「うん！わかった！」

そう言って女の子は内人の目の前から姿を消した。
そろそろ停電も治った頃なので寮に帰ろうとした。

寮につくが、まだエレベーターが使え無かったので仕方なく階段を
使った。

その途中で

「おっ？なんでまた当麻の部屋の前に……………」

当麻の部屋の前には三台の清掃ロボがあった。

興味本心で様子を見に行くと

「アレ……………さっきの子だ……………ん！？」

確かにさっき会ったシスターさんが倒れていた。

「おい！大丈夫かよ……………え？」

シスターを抱き抱えた時に腕に生温い感触がした。

「これって血……………だよな……………？」

内人は焦っていた。

明らかにそのシスターの背中から血が流れていた。
かなりの出血だった。

「誰がこんな事を………」

「うん？僕達『魔術師』だけど？」

振り向くと階段から昇って来る男の影があった。

（魔術師……？何いってんだコイツ？）

学園都市の中は全て科学によって出来ている。

そんな中、魔術師などという非科学を誰が信じるであろうか。

「わざわざアミにかかり戻ってくるとはね。忘れ物でもしたのかね？」

（さっきこの子が言ってた忘れ物か…）

それより何で、この子が倒れているのかが知りたかった。

「どうしてこんなに酷い事を……」

「酷い？神裂だってまさかこんな事になるとは思って無かったよ…」

「神裂……？誰だ？」

「僕と同じ魔術師だよ」

「普通こんな事するかよ……」

その長身の神父は呆れたように口を開く

「まあ、この現場を見てしまった君をただで帰す訳にはいかないだよ」

「何だと……？」

「この事が外の連中にばれたりするとマズイからね……だから……死ね」

その神父が吸っていた煙草を外に向かって投げ捨てた。

ボォォ！！

煙草は弾け飛び大きな炎に包まれる。

「な！？」

「僕の名前はステイルⅡマグヌスと名乗りたい所だけど、ここは”Fortis931”と言っておこうかな」

「ステイル……マグヌス……」

「僕達魔術師は魔術を使う時に真名を名乗ってはいけないという因習があつてね」

ザザザザザアァー！！

そしてステイルと名乗る神父の周りに炎が現れる。

「魔法名は……殺し名、かな？」

（マジで魔術師っているのかっ！？）

その炎は、魔術師の周りに結界を張るように立ち上っていた。

「巨人に苦痛の贈り物を」

魔術師が言うと、炎が内人に襲い掛かる。

いつもの内人なら焦らずに、まず能力を覚えて対処するが、ステイルの炎は余りにも強すぎた。

結果、逃げるという選択肢しかない。

内人は手摺りに手をかけると、そのまま外に飛び降りる。

しかし、ただ逃げる訳ではない。

それと、『飛び降りる』とは言っても内人が使う能力からすると、少し意味が違ってくる。

内人が使った能力は『自分の重力の方向を変える能力』という物だ。その能力で、寮の壁に張り付く事が出来る。

だが、levelが2なので15秒くらいが限界である。

「早く出てこいよ……」

一方、ステイルの方は

「まさか恐怖の余り、飛び降りるとはね」

呆れた顔で外を見下ろそうとする。

「まあ、殺す手間が省けていいんだが……な!？」

内人とステイルが目を合わす。

「作戦成功だ! オラッ!!」

そのまま魔術師に殴りかかる。

しかし慣れない体制からのパンチは、思いの他力が入らず一度は倒れたものの立ち上がってしまう。

「ふう〜流石に一発じゃダメか」

別にステイルも油断をしていた訳ではない。

内人のパンチの方が早かったただけであるからだ。
だからこそ許せなかった。

何も知らない人間に彼女を保護する事を邪魔され、その上殴られる事がどんなに許せ……いや、辛いものだったか

「まったく……本当に不快な気分だよ」

「それは俺もそうだぜ」

ステイルは、能力者相手に本気を出すとは思ってもみなかった。
それでも守りたい物があった。

「世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ」

彼女という一人の存在を守るために

「それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり。
それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり。その名は炎、その役は剣。

顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ」

轟！！！

爆発音とともに、魔術師の目の前に炎の巨人が現れる。

「殺れ、魔女狩りの王」
イノケンティウス

流石の内人も驚くしかない。

ヤバイ……そこらの能力者が無能力者に見える。
力の差を見せつけられた。

その炎の巨人の手が内人に向かってくる。

（くそっ！！覚えられねー！魔術だからかよ！）

内人は持っている能力を全てぶつけた。

振動能力、発火能力、念動能力、発電能力、風力能力、肉体強化、
出会った能力者達の能力を一斉に使う。

しかし、その炎の前では何もかも無力だった。

発火能力に関しては、まったくの無意味。

振動能力は炎によって炎の巨人を貫く事が出来ず、風力能力は熱風
によって掻き消される有様だ。

能力の発動と同時にステイルに突っ込んだ内人は熱風によって吹き
飛ばされる。

熱風の厚さは尋常ではなかった。

約1500度

その熱風が内人に襲い掛かる。

とっさに右腕が動き、地面に手が着いた瞬間に振動能力を使い、後
ろに後退する。

しかし

「ぐっあああああ!!!!」

左腕が熱風に当たる。

肉体強化により原形は留めてるものの、皮膚は焼けただれ、血が吹きだしていた。

何より感覚がない。

内人左腕は殺されたのだ。

「クソっ……マジでヤバイ……」

そのままステイルとは、違う方向に走る。

走る?……違う、逃げるだ。

今回ののは本当に逃げる。

ここからの反撃など内人には思いつかなかった。

死……頭の中がそれで埋め尽くされる。

「逃がさないよ」

炎の巨人が追ってくる。

段々と腕が痛み始めてきた。

階段に辿り着くが、足を絡ませ転げ落ちる。

追ってくる炎の巨人を振り払おうと全力で走る。

その中で、幾つものコピー用紙が壁に貼付けられているのが目に入る。

(何だよこれ……まさかっ!?)

普通では有り得ないほどのコピー用紙の数。

おそらく、魔術師の魔術の発動と関係があると内人は考えた。

詳しい事は考えられない。

しかし発動条件がコピー用紙、そして魔術が炎である事がわかった時点で内人の能力が発動するなど思いもしなかった。

ドックン

来た。

あの衝動が。

内人は炎の巨人と向かい合わせになって言った。

「覚えた！」

さらに言った。

「出ろ！！魔女狩りの王！！！」
イノケンティウス

内人の目の前にステイルが出したイノケンティウスと同じ物が現れる。

「そろそろ片付いたかな？」

ステイルは階段を下りる。

勝つ事はわかっていた。

自信しかなかった。

しかしその幻想は壊れる事になる。

「な、んだと……！！？」

階段を降りた先にいたのは、イノケンティウスとイノケンティウスだった。

「悪いが、魔術とやらをパクらせてもらったぜ」

「何故だ！？ルーンだって僕のオリジナルだぞ！」

「気づかないのか？」

「何をだ！？」

「簡単な話しだ。お前の貼ったコピー用紙を俺も使っただけだ」

「そんな、バカな！？」

それもそのはず、ルーンを貼ったとしても様々な計算を必要とする魔術だったからだ。

「覚える能力つつうのが俺の能力なんだけど」

「覚える能力…だど？」

「覚えた能力は『発動する』と想像する事で、演算すら必要ないんだ」

その言葉にステイルは愕然とする。

「そんな能力が」

「最近気が付いたんだよ」

まさか、こんなに黒子に感謝する事になるとは思わなかった。

「お前……覚悟は出来てるよな？」

「ッ!？」

ステイルの気が緩む。

それと同時にイノケンティウスの炎が弱まった。

そこにさっきと同様に能力をぶつけた。

今回はイノケンティウス付きだった。

「い、いの、イノケンティウス!!!!」

その攻撃はステイルのイノケンティウスを押し退るほどだった。
内人の能力が始めて届いた。

ブオオオオオン!!

コンクリートなどが崩れる音が鳴り響く。

「ハア…ハア…」

なんとか生き残る事が出来た内人は、緊張の糸が切れて座り込む。

「勝った……うぐっ!？」

激しい痛みに襲われる。

左腕の痛さだけではなかった。

「な、何で頭痛が!？」

その場で内人は倒れ込む。

「くそ……結局……あの子の事……助けて……あげられなかった」

そのまま内人は意識を手放す事になる。

魔術と科学（後書き）

やっと魔術がてできました。

上条さん出番ナシです…

次回は出てくるかも…

それでは次回作で!!

魔術と科学2

目が覚めたらそこは病室だった。

魔術師との戦いは、相打ちという形で終わった。

今は頭痛が引き、気分は悪くはないが左腕が痛む。

（あの子は大丈夫かな……くそっ！！こんな所で寝ている場合じゃねー！！）

立ち上がり病室を出ようとする。

扉に手をかけようとした時だった。

ガラガラガラ

病室に入ってきた人がいた。

黒子と初春だった。

「何をしていらっしやいますの！？内人様は絶対安静の身ですから寝ていて下さい！」

「そ、そうです！そんな体で外に出ようなんて！」

二人は内人を立ち塞がった。

「悪い……でも行かなきゃ」

「それならわたくしが変わりに行きますわ！」

（黒子に魔術師を関わらせる訳には……）

こんなに幼い子を戦場に行かせるわけにはいかなかった。

「頼む……行かせてくれ」

「駄目ですわ!! そんな怪我で……死んじゃったら……うつ……どうするんですか!」

内人の怪我は左腕だけではなかった。

熱風は体中に火傷を負わせた。

普通なら跡が残るほどの火傷だった。

しかしここは学園都市、火傷くらいなら跡を残さず治す事ができる。しかし見た目はそうだがやはり痛かった。

左腕に関しては、あまりにも酷い火傷でまだ治ってはなく、包帯がしてあった。

その包帯の上から血が滲み出している。

さらに階段を転げ落ちた時に身体に打撲などをしていた。

内人の身体には青アザだらけだった。

そんな内人の姿を見た黒子は驚くしかなかった。

やり過ぎというレベルではない。

明かに死ぬ寸前だった事がわかる。

その姿に黒子は耐え切れなくなり涙を流す。

「死なないから……絶対に戻って来る。だからそこをどいてくれ」

「そんな保障はどこにも……えっ?」

内人は黒子を抱きしめた。

理由なんて無い。

身体が勝手に動いたのだ。

「大丈夫……絶対に戻って来るから」

「絶対にですわよ……」

「ああ、絶対に戻って来る」

こうしてこの場を後にする。

魔術と科学2（後書き）

短いです。

僕も出来るだけ、長い奴を書きたいのですが……

時間がないです。

そろそろテストもあるので更新遅れます。

魔術と科学3

病院を飛びだしたのはいいが、何処に行けばいいのか分からない。

（まだ寮にいるのか？流石にあの出血じゃ動けないはずだし）

あれから何時間もたった今、あの子が生きている確率は0に等しかった。

それでも走る。

「生きててくれよ……」

寮に着くアンチスキル、ジャッジメントの姿があった。

今、寮の中に入る事は不可能だった。

崩壊寸前の寮を急ピッチで修復されているからだ。

という事は、あの子が居る訳がない。

じゃあの子は何処に行ったのか？

（確か……あの魔術師が『わざわざアミに掛かり戻って来るとはね』って言ってたな……）

あの子が倒れて居た場所は当麻の寮の前だった。

（あの子は当麻に用があったのか……）

それに気づくと、携帯を取り出して電話をする。

「この電話は只今使われておりません」

当麻の携帯に連絡する事が出来ない。
時間帯を考えると、補修というのも考えられる。
頼れるのは後ただ一人

「なんですか一鬼龍ちゃん」

小萌先生に連絡をした。

「当麻ってもう補修終わってますよね？」

「上条ちゃんですか？上条ちゃんなら家に居ますけど」

「先生の家！？」

「はい。何か上条ちゃんに用があるんですか？」

「話をさせて下さい」

「そうですか……わかりました。ちょっと待ってて下さい」

何で小萌先生の家当麻が居るのだろう？
寮が壊れてしまったからなのか

「今変わったぞ」

「当麻か、聞きたい事があるんだが……」

「何だ？」

「白い修道服を着たシスター知らないか？」

「おまつ……お前なんでその事……」

「知ってるんだな？」

「ああ……」

「今から俺も先生の家に行く。話しはそこでする」

「わかった」

当麻と電話を切ると急いで小萌先生の家に向かう。

「小萌先生は？」

小萌先生の家に着くとそこには、修道服の女の子と当麻が居た。

「今、買い物に行ったよ」

「さっきの電話の話しだが……」

「何を聞く……いや、鬼龍が言いたい事はわかる。魔術だろ」

「ああ、そうだ」

布団の中にいるのは、修道服を着ていた女の子だったが、今はパジャマを着ていた。生きていた。

始めて神様という存在を認めたくなった。
それだけ嬉しかった。

「ああ……魔術の事だ」

そして、今までであった事を話し合った。

その女の子の名前がインデックスだと言うこと、狙われてる理由も知る。

「コイツの頭の中には、十万三千冊の魔法書があつてそれを狙ってるのか？」

「今の段階だと、そうなるな」

「インデックス……どうする？だって身内とかいるの？」

「そこらへんもまだ分からないんだよな。インデックスが起きた時にでも聞くことにするか」

結果、インデックスを一時的に小萌先生に預かってもらう。

もちろん、小萌先生からも了解を得ている。

俺も当麻も疲れ果てて、その場で寝てしまった。

朝、目覚めると目の前にはインデックスが居た。

「おはよう、ないと！」

「うわっ！！！！」

おもわず、後ずさりをしてしまった。

「始めまして……だよね？」

「う、うん。そうだな」

「私の名前は、インデックスって言うんだよ」

「ああ、当麻から聞いてる。俺の名前は鬼龍内人って言うんだ。よろしくな！」

「うん！こちらこそだよ」

隣にはまだ、当麻が寝ていた。

台所では小萌先生が料理を作っていた。

（小萌先生って料理できるのかな……？）

心配をしながらも、インデックスと話しをする。

「その…私を助けてくれたのが、ないとだよね」

「ああ」

「その怪我は、その時にしたんだよね？」

内人は無言で頷く。

インデックスは悲しい顔をしながら言った。

「ごめん…なさい…」

「どうして謝るんだ？」

「だって…私のせいで、ないとは怪我したんだよ」

「確かにそうだけど、気にする事はない」

「気にするよ！赤の他人なんだよ私達……」

「小さい事は気にするんな。俺は倒れてる子に、手を差し延べないほど無責任な男じゃないよ」

俯いてるインデックスの頭を優しく撫でる。

「俺は助けたいと思ったから助けたんだ。別にインデックスのせいじゃないよ」

「ありがとね……ないと……」

インデックスの顔から笑顔が戻った。

そのまま立ち上がると、小萌先生の所に行ってしまった。

その後、朝ご飯を食べ、小萌先生は学校に行き、当麻はインデックスの看病をして、内人は一旦病院に帰る事にした。

それから二日がたった。

病院から出て、翌日まで戻らなかったのも、病院側にも心配をかけてしまった。

黒子にも説教を言われた。

そんな中、なんとか退院する事ができた。

魔術と科学3（後書き）

多分つまらない所です。

次回で『魔術と科学』が終了ですね。

感想書いてくれると嬉しいです……

魔術と科学4

退院の帰り道の事だった。

帰り道に小萌先生の家に寄ってから帰る事にした。

時間帯は夜で、人で賑わっている。

そんな道を歩いていると、十字路の所に人が集まっていた。

地面は切り刻まれ、風車が壊れて横たわっている。

その中心にいたのは、泣き崩れている小萌先生と血だらけの当麻だった。慌てて小萌先生の元に駆け寄り、叫んだ。

「先生、何やってるんですか!？」

「か、上条ちゃんが……」

血だらけの当麻は、動く気配がない。

内人はすぐに分かった。

(魔術師にやられたんだ!!！)

そう考える他なかった。

しかしインデックスの姿が見当たらない。

さらわれた、それしか考えられない。

「インデックスは何処に!？」

「え……? 確か……上条ちゃんと一緒だったような……」

最悪だ……さらわれた事しか頭の中がない。

そんな中、遠くから少女が走って来た。

「とうまゝ！何処に行ったんだよ！？」

「インデックス！？」

無事だった。

どうやら狙われたのは、当麻だけだったみたいだ。

「とうま！？その怪我どうしたの！？」

このままにしておく訳には、いかなかった。

「先生！」

「はっ、ハイ！？」

「今から先生の家に連れて行くが良いか？」

「問題はありませんけど……」

「それならさっさと行くぞ！！」

内人は当麻を担いで走る。

その後を小萌先生とインデックスがついて来る。

それから数分、十字路から小萌先生の家まで遠くはなかった。

小萌先生の家に着くと、すぐに傷の手当てをした。

頭を強く打ったせい意識は無かった。

しばらく当麻を小萌先生に診てもらった事にした。

インデックスは自分のせいで怪我をさせてしまった事が悔しかったのか、しばらく当麻の傍からは離れず、小萌先生と一緒に看病をし

ていた。

内人も小萌先生の所に居ようと思ったのだが、さっきまで入院をしてのでとりあえず寮に帰る事にした。

それから三日がたった。

朝から小萌先生の家に行くことにした。

当麻の意識はまだ戻ってはいない。

小萌先生は仕事のため家を出て行った。

それからインデックスとくだらない話しをして時間を潰していった。夜、やっと当麻が目を覚ました。

それを見たインデックスは涙を流しながら言う。

「わ：わたし、知らなかった：：とうまが魔術師と戦ってたなんて：」
俯きながらさらに続ける。

「つまんない事でへソ曲げて、とうまが死にかけてたのに、なんにもできなかったっ」

インデックスは当麻に抱き着いた。
顔は布団に潜らせ

「とうまを助けられなかった：：……」

そんなインデックスを安心させようとしてるのか、当麻の右腕が微

かに動く。

一度上がった腕は、途中で力尽きまた布団の上に戻ってしまう。
それに苦笑しつつ

「助けるって…それじゃ逆だろ」

やっとインデックスが泣き止む。

「とうま、体ふいとく？」

「いきなりなんだよ!？」

「んー!私だってケガ人の看病ぐらいできるんだから!」

インデックスは濡れたタオルを持って

「変、かな？」

当麻は思わずドキっとした。

それは内人も例外ではなかった。

「変じゃないと思う。そうしてると本物のシスターに見える」

「シスターだよっ」

呆れた顔をしながら言う

「私と内人が看なかったらとうま、三日の間に飢え死にしちゃって
んらね!？」

その言葉に当麻は驚く。

(俺…三日も寝てたのか…？ん…？三日？)

当麻は思い出す。

神裂火織と名乗る魔術師が言った事を

『もって三日』

おそろおそろ聞いてみる。

「イン…デック…今日、何日だ！？」

その間にインデックスは、素直に答えた。

「嘘…だろ…」

「嘘じゃないよ」

(くっそ…三日も無駄にしたのかよ…)

布団を飛び出し、インデックスの腕を掴む。

「と、とうま！？」

「いいから今すぐ、ここから出るんだ！！」

「出るって…何処に行くの？」

「当麻、冷静になって物を言え！いきなり、出ていくって意味わか

んねーよ!？」

当麻は内人の話をまったく聞いていなかった。

ガシャ

ドアノブが開く音がした。

入ってきたのは二人の魔術師。

一人は内人と戦ったステイルⅡマグヌスと名乗る魔術師。

もう一人は、おそらく当麻を襲ったとみられる女性の魔術師だった。

「リミットだ」

当麻は庇うようにインデックスの前に立つ。

「そんな体じゃ簡単には逃げられないようだね」

「やめて!」

その言葉で空気が凍る。

「これ以上とうまを傷付けないで!」

二人の魔術師の目が変わる。

「インデックスこいつらは」

「私ならなんでもするから…どこでも…ついて行く…から…お願い…っ」

インデックスは倒れる。

それを受け止めたのはステイルだった。

「今夜午前零時」

「!!」

「その時までには術式を組み上げる」

「…まっ…待てよ!聞いてくれ!!」

会話についていけない内人が口を開く。

「すまん…話しについていけないのは、俺だけか?」

「あっ…鬼龍はなにも知らなかったな…」

「つーかテメー!!またインデックスに手を出しに来たのか赤髪神父!?!次こそは二度と立ち上がれないようにしてやろうか!!」

「うるさいな。次は負けないけどね」

「ステイル、張り合って暇はありません。早く術式を組み上げましょう」

もう一人の魔術師が口を開いた。

「さっきから術式、術式って何なんだよ!」

あまりのテンパる内人に当麻が

「わかった：鬼龍には全て話すよ」

当麻が言ったのは、インデックスの脳の85%は、十万三千冊の魔道書によって埋めつくされていて、残りの15%で”忘れる”事の出来ないインデックスは一年周期で『思い出』を削る。

当麻が曰く、『思い出』を削る理由はインデックスの脳の『思い出』を消さないと脳がパンクを起こすらしい。
これを聞いた内人は思うのであった、

(こいつら騙されてるな：)

内人は全てがわかった。

当麻が言った情報が全て嘘だと。

内人はこう見えても学園都市でも”覚える能力”と言う能力を持つ、唯一の能力者だ。

その能力は”原石”というものに分類されている。

そのためか内人の開発の授業は、クラスメイトとは一緒に行わず先生とマンツーマンで行っていた。

だから”脳”に関しては、普通の人よりも知識があるのだ。

「おい：お前ら騙されてるぞ」

「ん？鬼龍：何言ってるんだよ！？」

「だから、その情報は全て誤りなんだよ！考えてみろ！15%がたったの一年で埋めつくされるのか！？」

「どういうことだ？」

「そもそも人の脳つつうものは、どんなに覚えてもパンクする事なんて絶対ないんだよ！簡単に話せば、燃えるゴミと燃えないゴミは容れ物が違うだろ！それと同じなんだよ！魔道書と思い出では、脳の中でそれぞれ別の容れ物に記憶されるんだよ！例えば記憶喪失になった人は歩き方を忘れているか？違うだろ！たとえ何十万冊魔道書を覚えても、思い出を削らなければならぬことなんて、絶対に無いんだ！」

言った：知っている全てを言った。

「そ、そんな：それでは私達がやっていた事は…」

「無意味だったんだよ」

「じゃあ何でインデックスがこんなに苦しんでいるんだ！？」

ステイルは叫んだ。

無意味だったとは思いたくなかった。

「あくまでも俺の考えだが：一年周期で『思い出』を消すのは無駄な知識を覚えさせないためなんじゃないのか？無駄な知識を覚える事で困るのは、テメーら『教会』なんじゃねーのか？」

「だ、だからインデックスが苦しんでる理由を「まだわかんないのか！！」なっ！？」

「魔術に決まってるだろ！！！！」

「「！？」」

二人の魔術師の動きが止まる。

「ここまで話せば小学生でもわかるぞ。何のために脳がついてる？
そんなの考えるためだろ！お前ら、なに『教会』の話しを鵜呑みに
してるんだよ！少しは疑わなかったのか！？」

「そんな…」

「その魔術はどこにかかっているというんだ！？」

「ステイルつつたな…お前、本当に子供だな。そんなも自分で考
えられないのか？」

「くっ…」

流石のステイルも言い返せなかった。

「鬼龍、お前の言いたい事はわかった。本当にそいつがあるとした
ら、”頭”に近い場所にあって普段人の目に触れない、そしてイン
デックス本人も気付かない場所だな」

「さすが当麻、その通りだ」

そこまで分かれば内人がとる行動は簡単だ。
寝ているインデックスに近寄り、口を開く。
あった。

喉の近くに何らかの文字が書かれていた。

「当麻！コッチに来い」

「あ、ああ」

当麻にインデックスの口を覗きこませる。

「な、なんだこれ？」

「それに当麻の右手で触れてみてくれ」

「わかった」

当麻がインデックスの口の中に右手を入れる。
その文字に触れた瞬間

ビキ

気付いた時には当麻が後ろに飛ばされていた。
内人は急いでインデックスに目を向けるとそこには、

「警告――、禁書目録の首輪、その破壊を確認。再生――失敗。首輪の再生は不可能。『書庫』の保護のため、侵入者の迎撃を優先します」

誰だ・・・

素直な感想だった。

インデックスは宙に浮き、二つの魔方陣が現れた。
その魔方陣は互いに引き寄せあい、重なる。
重なったところからは、黒い塊が見えた。

「何だよ・・・これ・・・」

無理だ、勝てるはずがない。

そう思った瞬間だった。

内人の目の前は光に包まれた。

五感の全てが奪われた気がした。

いや、一瞬奪われていた。

視界が治ると目の前のは当麻がいた。

「何つつたてんだよ！」

「わ、悪い」

その光線を当麻は、真っ向から受け止めていた。
しかし、その右手からは血が噴出している・

「「竜王の息吹！」」
ドラゴンブレス

「ありえない……どうしてあの子が魔術を……」

「インデックスは何で魔術が使えないか考えた事あるか!?!」

「それはもともと魔術が使えないか身体で……」

「違う! 自分自身に魔術をかけていたからだ! 教会側がかけた魔術をインデックスは、ずっと自分の魔力で維持させられてたんだよ!」

「黙れ! 貴様らに何が分かる!?!」

「現実を見ろ! いつまで拗ねてるつもりなんだ! インデックスが笑って暮らせる世界にしたかったんだろ!?! 今、その願いがかなうんだよ! その手を伸ばせば届くんだ!?! さっさと始めるぞ! 魔術師!?!」

「「!?!」」

「ぐあっ!」

当麻の包帯だらけの右手は、限界に近ずいていた。

バシッ

インデックスから放たれている竜王の殺息に押され、ついに右手が弾かれてしまう。

(やっぱ…)

「Salvare000!!」

その光線が当麻に当たる瞬間に、当麻は神裂の声を聞いた。

それは日本語ではなかった。

しかしわかる。

それは『魔法名』だ。

神裂からいくつものワイヤーが飛び出し、インデックスに襲い掛かる。

しかし狙った先はインデックスの下にある畳だ。

そのワイヤーが畳を切り裂く。

足元が崩れたインデックスは後ろに倒れ、目の動きに連動して魔法陣も動く。

天に向かって竜王の殺息が放たれた。

それと同時に天からは羽が降りてきた。

「それは『竜王の息殺』、伝説にある聖ジョージのドラゴンの一撃と同義です」

ドラゴンって何？ぐらいの気持ちで聞いていたが、そんな場合ではない。

「余波の『光の羽』に当たっただけでも危険です。インデックスのもとへ！」

『光の羽』と呼ばれる羽に触れると危険で、インデックスに当たるのを防ぐために当麻は走る。

だが、それよりも先にインデックスが首を巡らせた。再び竜王の息殺が当麻に振り落とされる。

「魔女狩りの王！（イノケンティウス）」

思わず目を閉じてしまった当麻の前には、人のカタチを取る巨大な炎は、両手を広げて真正面から竜王の息殺を受け止めていた。

「行け、能力者！」

スタイルが叫ぶ

「元々あの子の制限時間は過ぎているんだ！何かを成し遂げたいなら、一秒でも時間を稼ごうとするな！！」

当麻は何も答えないで走る。

イノケンティウスは竜王の息殺に押され始めた。

「――警告、第二章第一節。炎の魔術の術式を逆算に成功しました。曲解した十字教のモチーフをルーンにより記述したものと判明。対十字教用の術式を組み込み中………第一式、第二式、第三式。命

名、『神よ、何故私を見捨てたのですか』完全発動まで十二秒」

竜王の息殺は純白の色から真紅へと変化する。

イノケンティウスの再生スピードがみるみると弱まっていく。

このまま走ったら、この羽に当たる。

しかし一枚一枚右手で打ち落としていたら、時間がかかる。

インデックスに体勢を立て直されるよりも、イノケンティウスが保たないと思った瞬間だった。

「魔女狩りの王！^{イノケンティウス}！」

内人の叫びと共に、二体目のイノケンティウスが現れる。

それを見て驚いていたのが当麻と神裂だった。

しかし驚いている暇などない。

それによって頭上の羽を消しながらインデックスの方に向かえる。

そして当麻は右手を魔法陣に当てる。

その魔法陣は砕けちった。

「ー警、こく。最終……章。第、零ー……。『首輪、』致命的な、破壊……再生、不可……消」

ブッン

インデックスの口は止まった。

竜王の息殺も消え、魔法陣もなくなった。

そして『光の羽』は全て当麻の右手によって打ち落とされている。

それにも関わらず当麻は倒れてしまった。

身体中は竜王の息殺に耐えられなく、血だらけになっていた。

「当麻！おい、大丈夫か！」

明らかに大丈夫ではない。
すると神裂が

「私が上条当麻を病院に連れていきます。後から貴方達も来て下さい」

神裂は当麻を担いで部屋を出ていった。

「大丈夫なのか？」

思わずステイルに聞いてしまう。

「大丈夫だ。神裂は世界で20人しかいない『聖人』の一人だから、そこらへんの人とは身体能力が違う」

平然と話す。

また新たな魔術用語が出てきた。

「それより僕は病院に向かうけど、君はどうするつもりだ？」

「俺も行くよ」

二人は病院に向かって走り始めた。

病院に着くと当麻は治療中だった。
病院内の長イスに神裂が座っていた。
そこに内人とステイルも座る。

「鬼龍内人、あなたには迷惑をかけました。本当にすみませんでした」

「別に謝ることじゃないって」

「でも、あなたも怪我をしてしまったし」

「あゝ…ステイルがつけた火傷のことね」

不意にステイルの方に向く。

「うっ…そ、それは…アレだ。やはり魔術のことを知られたからには…」

「ステイル！そんな事で人を殺そうとしたのですか！そんなことから記憶の抹消だけで充分ですよ！」

（それも酷いぞ…神裂…）

心の中でツツコむ。

「まっ良いじゃねーか、インデックスも助かったことだし……………ん！？インデックスはどうした！？」

「大丈夫ですよ。私が病院に来る途中であの部屋の住人が帰って来

るのが見えましたから」

「小萌先生も大変だな…っかあの壊れた部屋、どうするつもりだ？」

「それも問題はありません。私達『必要悪の教会』が責任をもって修理代を払います」

（問題ありすぎだから…）

「話し変わるけど…ステイルって歳いくつだ？」

「14才だよ」

「14…老けてんな！って、おい！タバコ吸うな、ここは病院だぞ！それより未成年だろお前！」

正直驚いた。

未成年なのは分かっていたが14才は予想外だった。

「僕のことはいいよ。それより神裂はいくつに見える？」

神裂を見て、笑いながら言った。

「ちょっと！ステイル、余計なことを「18！！」えっ……」

直感で言った。

何故だか本能が働いて、18という数字が出た。

内人の本能が働く時は、いつも身に危険が迫っている時だ。

「せ、正解です…」

（ふゝ…よく分からないが危機は去ったみたいだ…）

「す、すごい…一発で分かるなんて」

「だ、だろ。いやゝ神裂さんは凄い綺麗だし、そんな露出度が高い服は若くないと着れないし！」

何故だかテンパる内人だったが

「露出度が高いって…これは術式を組むためには仕方がないんです！」

イスから立ち上がり神裂がキレる。

「す、すいません！そうだと思います！で、でも神裂さんはどんな服を着ても似合うんでしょね！」

その言葉に神裂は顔を赤める。

「ど、どんな服って言われても…この服以外にはあと…浴衣しかない」

「それなら今度、服でも買いに行きましょう！うん…夏休み中にもどうですか？」

間髪入れずに話す内人。
これも本能だ。

「暇な日があれば……うかがいます…」

顔を俯かせて言った。

「ああ、いつでも来いよ！神裂って携帯持ってるか？」

「い、いや…機械は苦手なので…」

「あ、そうか…悪かったな」

どんよりした空気が流れる。

「でも…あなたが言うなら挑戦してみます…そのうち…」

「挑戦することは良いことだからな！俺は応援するぞ」

今まで黙っていたステイルの口が開く

「握力で携帯を壊さないといいけどね……」

「また余計なこと…」

「うっ！」

それはいきなりだった。

今までに経験したことのない頭痛だった。

あまりの痛さに頭を抱えてイスから転げ落ちる。

「いっつ…！」

「ど、どうしたんですか!？」

床の上でもがく内人を見て焦る神裂。

しかし内人は何も考えられなくなるほどの頭痛の前には、どうする事もできない。

内人の意識はそこで途絶える。

魔術と科学4（後書き）

上条さんの記憶は無くなりません。

完全にストーリー変えてますね。

まあ、上条さんの記憶がなくなったら書くのが面倒になる……じゃなくて無くならない方がストーリーが作りやすいからです。

感想などを書いてくれると嬉しいです。

それではまた！

魔術と科学5 (前書き)

凄く文章が雑です…

読みにくいと思いますが、どうぞよろしくです…

魔術と科学5

目が覚めると見覚えのある部屋にいた。

「おっと、目が覚めたみたいだね」

カエル？……ではなくここの病院の先生みたいだ。

「えーっと…なんでまたここに？」

「能力の使い過ぎ…かな？」

「曖昧ですね…」

「今までに前例がないからね」

「それで使い過ぎといいますと？」

「君、能力で『魔術』を使ったね」

ゾク

背筋が凍る。

何故魔術のことを知っているのか？という疑問しかない。

「あんた、一体何物なんだよ…」

「私はこの病院で院長をやってる……まあみんなからは『冥土返し』って呼ばれてるけど…」

「本名は？」

「事情があつて言えない」
「ますます不安にある。」

「それで…何で魔術を…」

「学園都市側が魔術を知らない訳がないだろ。世間には公開してないだけなんだよ」

「ですよね…」

「本題に戻すけど…一度能力を手に入れると魔力が使えにくくなってしまうんだ。君の場合はそれを無理に使ってしまったからなんだ。無理に使うと副作用が起こる。例えば頭痛が起きるとかね」

「そうですか…ならもう魔術は使わない方がいいですね」

「そうだね。それと、まあ無いとは思うけどLEVEL5の能力を仮に覚えたとしても使わない方が身のためだよ」

「どういふことですか？」

「決定事項ではないけど…君の能力は身体…いや…精神にもダメージが大きいみたいだ」

ハッキリ言うと、内人も自分の『覚える能力』に関して何も知らなかった。

「俺の能力は一体…」

「だから”原石”に分類されているんだよ」

原石：それはまだ未知の能力のことをさす。

内人もその能力を持っている。

実際、どうやって能力を使っているか分からないのであったからだ。使う、と考えるだけで使うことが出来る。

ただそれだけである。

演算なんて必要としない能力なのだ。

「後、今日で退院だから……それと手紙っ」と

冥土返しから渡されたのは手紙。

「それでは気をつけて」

「あ、はい」

手紙を読もうと思った時だった

ガッターン

凄い勢いで扉が開く

「ハアハアハア…」

「く、黒子!？」

汗をかきながら部屋に入って来た。

「内人様！また姿が見えなくなったと思ったら、またですか！？」

「うお！？どうした黒子？」

手には凄い量の果物があつた。

「絶対に戻ってくると言ったのに……まあいいですわ。現に今わたくしの目の前にいますから」

「そ、そうですか」

「まったく…人をどれだけ心配させれば気が済むんですかね…本当ににも…内人様ったら」

そこまで言うとはットの横にあつた椅子に腰をかけた。

「は…内人様？この手紙は何ですか？」

「あつ、これは」

その手紙は封筒に入っていた。
その封筒には

『上条当麻様へ』

神裂火織より』

「神裂…火織…誰ですの！？これは女性ですの女性なんですか女性なんですね！？まさか…内人様に女性の友達が……」

「いるわ！！」

「中身は…」

黒子は封筒を開けて手紙をだそうとする。

「だー！！ダメダメダメ！！」

中身には魔術のことが書いてあることは、目に見えている。
取り上げようとするが

バサッ

「えーと…『夏休みのお話ですが、今仕事が大変なのでその仕事が終わってから学園都市に行きたいと思います。携帯は挑戦してみましたけど、三個目です。決して握り潰した訳ではありません。ちょっと事故があっただけです。メールの仕方にもよくわからないので今度教えて下さい。……あっ！？」

「あーもう！勝手に読むなよ！！」

読み途中なのを無理矢理取り返した。

後々読んでみた所、インデックスはしばらく好きにさせておくらしい。

と、いかしばらくの間当麻が預かる事になったのだ。

（当麻も大変だな）

少しは手伝ってやるかなどと思ったりするのであった。

魔術と科学5（後書き）

取り合えず『魔術と科学』は終了っす…

文章短い…最悪ですね…

ごめん…うまく書けなくて…

時間も取れなくて…最近大変で…テストの点も良くないし…ストレス溜まりまくりで…食欲でないし…もう最悪っす…

すみません…更新遅れます。

最強の能力VSZEROの能力（前書き）

※誤字、脱字に注意！

最強の能力VSZEROの能力

あれから数日がたった。

当麻も目を覚まして、今はインデックスと一緒に暮らしている。当麻が補習に行っている間は、基本内人の家にいる。

「ないとお腹がすいたんだよ」

「ハイハイ」

現在の時刻は3時、オヤツの時間だ。

昼ご飯は一緒に食べて、たまに夜ご飯も一緒に食べる。神裂の手紙には誤りがあった。

『しばらくインデックスは上条当麻と暮らす』

違うだろ……うん……違う。

朝から夕方あたりまでインデックスと内人は一緒にいるのだ。

それが一週間続く。

慣れはじめた。

当初は一週間だけだったのが二週間になってしまった。

理由は補習を休みまくったからだ。

いくら理由があるとは言え、補習を休んだことには代わりはない。

『上条ちゃん！補習をいっぱい休んだので一週間プラスです！』

『一週間プラスか…不幸だ…』

とのことだった。

それのお陰で今内人とインデックスは一緒にいるのだ。

「ほい、お菓子だ」

「今日は、おせんべいとチョコのお菓子なんだね」

「そうだな」

「とうまはお菓子を買ってくれないんだよ」

ガブガブ

「ちょっと…俺の分が…」

インデックスの両手にはそれぞれ違うお菓子が握られている。
気づくと内人のお菓子も無くなっているのも、よくあることだ。

「当麻も大変だな…」

「ないと、今何か言った？」

「別に…」

内人の場合は食費に困ることはない。

LEVEL1なのだが、原石に分類されている能力なのでそれなりに奨学金がでる。

しかし当麻はどうだろう。

右手には『幻想殺し』という、異能の力なら全てを消し去る謎の力がある。

しかし、学園側はそれを能力とは認めない。

よって無能力者。

学園側から出る金なんて、たかがしれている。

それでも、一人で生活するには最低限の金額なのだが…今の当麻はそれで二人分を養わなくてはならない。

それを見兼ねた内人が、当麻の居ない間インデックスを預かることにした。

「おい、インデックス！これから夜ご飯の買い出しに行くけど、一緒に行くか？」

「ごめん、ないと。これからカナミンの再放送あるから行けない」

毎日これだ。

少しは手伝ってくれると助かるのだが…

仕方がないので内人一人で行くことにした。

「んじゃ、行ってくるぞ」

「行ってらっしゃい、ないと」

内人は寮を出てからすぐの所にあるスーパーに行くことにした。と、いうかそこしか使わない。

スーパーに入り、適当な物を買って寮に帰ることにした。

スーパーを出ると外は人で賑わっていた。

（ん？そんな長い時間スーパーに居たのか？）

そんな事を思っていると、人混みの中に見覚えのある人を見つけた。

「あっ！美琴~~~~！！」

名前を呼んでみるが返事はない。

周りの音で聞こえないのであろう。

だが、一つ疑問な点があった。

それは、美琴がビルとビルの間に姿を消したことだった。

（何であんな所に行くんだろう？）

好奇心から、美琴を追ってみる事にした。

しかし、その道はゴミがいっぱい落ちており、道は一人がやっと進める幅である。

数メートル進むと、『第8地区』と書かれた看板があった。

『第8地区』とは、廃工場などが今だにある所だ。

ほとんど人の出入りがない。

そんな所に何故美琴は行ったのだろう。

右手にはスーパールの袋を手に『第8地区』に足を踏み入れた。
次の瞬間

ゴン！！

トタンが凹む音がした。

思わずスーパールの袋を放してしまった。

次々から次へとトタンの凹む音が聞こえる。

スーパールの袋など気にせず、足を早めた。

廃工場の中を進んで行くと、そこはまるで地獄のようだった。

地面はエグれ、周りのトタンは凹み、中には突き破れている所もあ

る。

そのコンクリートの瓦礫の中に一人の人間が立っていた。

髪の毛の色は白、目は見た物を殺さんとはかりの深紅の色。

まるで悪魔のようだった。

緊張で足が震えた。

だが、奴の足元を見た時、今までにない怒りを覚えた。

そこにいたのは御坂美琴。

正確に言うと、御坂美琴の死体だ。

右足は引きちぎれ、左腕はありえない方向に折れ曲がり、腹の皮膚は裂けて中からは臓器が出ていた。

「嘘…だろ…」

声が漏れる。

そして悪魔が口を開いた。

「たっく…派手にやりすぎたなア」

派手？そんな所ではない。

人が死んでいるのだ。

しかも無惨な姿で。

普通では考えられないことだった。

頭が回らない、目の前の光景が現実とは思えない。

その反応が身体に現れ、寒気がする。

気分が悪くなり、吐き出したくなった。

それを堪えて悪魔の方を見た。

「あん？誰だアお前？」

「だ、誰だじゃねーだろ！！テメエーこそ美琴に何しやがった！！」

「ンだよ…見られちゃマズインだよなァ…この『実験』」

「実験…だと…?」

「そオだよ。『実験』だ」

実験……

そんなもので人を殺すのか…?

普通の人ができることではない。

『実験』と言っているのだから、おそらく奴一人でやっているのではないのであろう。

「オマエ…コイツの知り合いか？」

グシャ

そう言いながら奴は、美琴を蹴り上げた。

グシャ

肉が潰れる音がした。

奴はまるで、飽きた玩具を捨てる子供のような目をしていた。

そして目の前に御坂美琴の死体が転がる。

よく見ると至る所から血が流れていた。

目からも鼻からも耳からも口からも。

「気にすることはねエ。なんせ使い捨ての人形でマジモンの人間じゃ………ってオイ？」

内人は泣き崩れていた。

「ぶさけんな…」

「あ？なんか言ったか？」

「ぶさけんなってんだろが発狂野郎があ！！！」

「発狂野郎だア？オマエ、誰に口聞いてンのか知ってンのかよ？つかそんな汚ねー顔で言われても説得力に欠けてンだよ」

内人は立ち上がると

「テメエーが誰だろうと関係ねー！！アンチスキルに受け渡す前に、テメエーの事を潰す！！」

「あゝ、威勢がいいことだなアゝ。一応言っておくが、俺を誰だか知って言ってンのかア？学園都市で7人しかいないLevel 5の中でも『最強』って呼ばれている一方通行だぜエ？？」

「ソレ…本名か？」

「ンなわけねエだろ」

不安になる内人であった。

最強の能力VSZEROの能力（後書き）

久しぶり…かな？

タイトルがショボいですね。

『最強VS最弱』みたいにカッコイイのが良かったんですけど…別に内人は最弱では…Level4と同じくらい強いので使えませんでした。

誰か文才をわけてくれ…：毎日がスランプだよ…

→言ってる事が矛盾してる（笑
部活とか何やかんや大変っす。

アーティストですけど、ガゼットが最近きてます。
めっちゃカッコイイ！！

すまん…余計なこと書いて…

次回作も頑張るので応援ヨロシク（o^ー^）b

最強の能力VSZEROの能力2（前書き）

ガチで誤字、脱字が凄いことになってるはず…
そこらへん…本当にすいません!!!!

最強の能力VSZEROの能力2

怒りで我を忘れた内人は一方通行に殴りかかる。

「うおおおおお!!!」

内人のストレートは一方通行の顔面を捕えたように見えた。

しかし、その内人な拳は一方通行に触れた瞬間弾き返された。気付くと内人はコンクリートにめりこんでいた。

肉体強化により、かすり傷ですんだが普通の人が受けたら大怪我だ。約10メートル。

一方通行と内人の間の距離が一瞬にして開いた。何をされたか分からない。

「なんだ…弱いじゃねェかよ」

次の一撃で内人を殺そうと思った一方通行。

しかし、その考えはすぐに変わることになる。

内人は立ち上がると炎を一方通行に投げつけた。

炎は一方通行に当たった。

だが、その炎はまるで一方通行が放った如く内人に跳ね返って来た。

「オマエ…おもしれェなァ。何だ、その能力は？」

内人は聞く耳をもたない。

間髪入れず振動波を放つ。

が、

「何だよ!？」

その攻撃すらも弾き返される。

「いくつ能力持つてるンだよオイ??」

驚いているのは内人だけではなかった。

一方通行も同様に今起きていることが現実の物だとは思えていなかった。

しかし、一方通行にはどんな能力も敵ではない。

たとえば自分以外の Level 5 全員と戦っても無傷で勝てる自信がある。

それどころか、学園都市全ての能力者を相手でも勝てる自信しかない。一方通行は地面に向かって蹴りを入れた。

その足は地面を砕き、石、瓦礫の破片が弾丸のように内人に襲う。

「くっ……!!」

いくら肉体強化していても、痛いものは痛いのだ。

「こんなもンじゃねエだろォ!!」

一方通行は踏み込む足が、地面に当たった瞬間、爆発を起こしたような音が鳴る。

まるでロケットのように向かって来る。その速さに驚く間もなく、一方通行の腕が目に入る。

「よけねエと死ンじまうぞ!!!」

内人は身体から振動を放ち、身体を弾き飛ばしてなんとか一方通行の攻撃を避ける。

「な、何なんだだよ？その能力！？」

「考えてる暇があんなら、身体を動かせェっの！」

容赦なく一方通行は、内人に拳を飛ばす。

その拳をギリギリで避けるが、瓦礫に足を取られて転びそうになる。

「ヤバっ！！！」

一方通行の拳が右肩に当たる。

触れた瞬間、後ろにあるコンクリートの壁に激突する。
痛む身体を起こして、体勢を立て直そうとするが遅い。
目の前には一方通行がいた。

「もう少しは楽しめるかと思っただけどなァ……」

つまらなそうな目をしながら一方通行は腕を伸ばし、内人の目の前にもってくる。

「最後に言っておくが、俺の能力は『反射』じゃねェんだよ。『ベクトル変換』が本当の能力だァ。触れただけで、人間の血の流れを逆にすれば、アツというまに血だらけにすることもできる。つったら、もうわかるよな？？」

「や…やめ…」

「ン？さっきの強気な姿勢はどォした？今さらやめろって言われてやめろと思うかァ？」

駄目だ…この状況から抜き出すことが出来ない。
こんな時に出来るはずのない事を考えていた。

（こんな時に黒子のテレポートが使えたら…）

「それじゃーな、どっかの誰かサン」

一方通行の手が内人に触れる。
しかし

「!!!!」

触れたと思った手は触れてはいなかった。
何より、一方通行の目の前から内人が消えていたのだ。

「消えた…だと…？」

一方通行は辺りを見回す。
すると一方通行の後ろ、約15メートル先に内人の姿があった。

「テレポート…一体、どんな能力なんだよ！」

内人も自分でテレポートを使ったことに驚いていた。
使える訳がないのだ。

黒子のLevelは4。

まず、見るだけでは覚えることは不可。

それに体感したこともないのに覚えられるはずがない。

「何で黒子の能力を…」

考えてる暇はない。

使えると分かった今、一方通行から逃げることは不可能ではなくな

った。

今、自分が死んだらこの事を伝える人がいなくなるからだ。

せめてアンチスキルにだけでも伝える事が出来ればいいのだ。

内人はテレポートを使って逃げる。

しかし、その後を一方通行がもの凄い勢いで追いかけて来る。

工場から出て、ビルの間から『第8地区』から逃げだそうとするが、

「知ってるかア？テレポートってATM拡散力場を崩されると使えなくなるってよォ！！」

ズドン！！！！

一方通行が何らかのベクトルを変換させて、ビルの壁を壊す。

その余波はATM拡散力場に影響を及ぼす。

それによって内人は一時的にテレポートが使えなくなる。

「やべえ！！逃げらんねー！？」

後もう少しでビルとビルの間から抜け出せるのだが、一方通行はそれよりも早く追いかけて来る。

右側にビルの非常階段があるのに気が付いた。そのドアを突き破り、階段を駆け登る。

「駄目だ！あんなのに勝てるはずがない！！」

完全にナメていた。

学園都市第一位があそこまで強いとは考えてなかった。

『最強』

その言葉は、一方通行のためだけにあるようにさえ思える。階段をいくつも駆け上がり、ある一室に飛び込んだ。今、テレポートをしたくても出来ない状況に気が付く。

「うっ…まずい…何処にテレポートすれば…」

その一室は、ビルの中にあり、さらにかなり高い所なあるらしい。

この部屋から出れば一方通行に会う危険性がある。

テレポートがしたくても、何処にテレポートをしようとしても距離がありすぎる。

この状況で一方通行から逃げることは、ほぼ不可能に近かった。

「最悪だ…死ぬのかな俺…」

美琴と出会ったことを後悔する。

出会わなければよかったと。

今は自分の命が何よりも惜しい。

恐怖心からか手が震え始めた。

「冷静になれ俺…」

必死に自分を落ち着かそうとするが震えが止まらない。

一方通行から能力を覚えることは出来ない。

Level5だから。

それなら覚えることが難しい、Level4の黒子の能力は一体いつ覚えたのか。

体感したことのない能力であったのに覚えられた。

身体の何処かが触れた。

手…違う、脚…違う。

考えるが何も出てこない。

(アレ?…ひょっとして…)

黒子との病院での出来事を思い出す。

今までで能力者で黒子しか触れたことのない場所が一つだけあったのを思い出すことが出来た。

『額』

それしかない。

絶対とは言いきれないが、おそらくそれだ。

内人は決心をする。

一方通行の能力を『覚える』と。

その行動がどんな結果になろうと関係ない。

美琴と出会わなければよかった、そんな風には思いたくない。

カッ…カッ…カッ…

階段を登ってくる音がする。

「いつまで隠れてるつもりなんだよ! いい加減潔く死ねっつてンだろうがア!!」

内人は意を決して一方通行のいる通路に飛び出す。

「アハっ! なんだよ、探す手間がはぶけたじゃねーか」

「ハア…ハア…」

息切れが激しい。

今の内人の心拍数は反発じゃない。

いつ心臓が止まってもおかしくないとさえ思う。

「鬼ごっこは終わりってかア。まあ、捕まったら死んじう、ちょっと過激なもンだアけどな!!」

一方通行が笑いだす。

その声すら内人には聞こえない。

震える脚を無理矢理動かして叫ぶ。

「うおおおお!!」

そこからの内人の記憶はない。

最強の能力VSZEROの能力2（後書き）

読みにくいですね。

急いで書いたので大変なことになってます。

そんなんでも頑張りますのでヨロシクお願いします！

次回は近いうちに投稿出来ると思います。

それでは！！

最強の能力VSZEROの能力3（前書き）

アンチスキル、ジャツジメント視点です。

最強の能力VSZEROの能力3

アンチスキルの本部にある一通の電話がはいった。

それは、『第8地区』で爆発事件が起こったとのことだ。
ある一人の男が

「『第8地区』で爆発事件が起きた。すぐさま現場に迎え！なお、ジャッジメントにも連絡をいれておけ！」

その男の声は部屋一帯に響き渡る。
その声で何人もの人が動き始めた。

「えっ？『第8地区』で爆発事件？」

ジャッジメントの初春の元に連絡がくる。

『どうやら大きな爆発らしい。ジャッジメントの応援を頼む』

「ハイ。わかりました」

初春は思っていた。

どうせ、スキルアウトが起こしたものだろと。

念のため人工衛星から『第8地区』の映像を見ることにした。

「え……………」

その映像に初春は言葉をなくした。

「まったく騒がしいですわね…何ですの？この爆発音は？」

黒子はまたどこかで工事が行われているのとはかり思っていた。

「それにしても五月蠅いですわ…様子でも見に行ったほうが良いのでは？…んっ？初春から電話」

黒子のポケットから電話が鳴る。

「どうしましたの初春？」

『た、大変です！！』

「ちよっ！落ちいて話して下さいさる？」

『たった今、入った連絡ですが…『第8地区』で爆発事件…いや壊滅してます！！』

今、黒子のいる所から『第8地区』は結構離れていた。
だからあまり気にしなかったのだが、この爆発音はそこから出ているらしい。

「壊滅って一体何がありましたの？」

『えーと…言葉ではちょっと…人工衛星からの映像を携帯に送ります』

その映像を目にした黒子は、

「こ、これは一体…何が…」

この世の物とは思えない物を見る目だった。
そこに写っているのは地獄。

建物は全て全壊し、至る所に大きなクレーターのような物があつた。

『第8地区』は空爆にでもあつたかのようだった。

その映像を見た黒子は走りだす。

映像の中にはある人がいたからだ。

「内人様…!!」

最強の能力VSZEROの能力3（後書き）

ちよつと短いかな…

視点が違います。

次回もこんな感じですよ。

最強の能力VSZEROの能力4（前書き）

美琴視点です。

最強の能力VSZEROの能力4

美琴は『第8地区』の前にいた。

「今日もやってるんだよね…」

その日に行われる『実験』の場所によく行くが、何回行っても心が痛む。

それがたとえクローンだとしても。

「それにしても今日のは激しいわね…」

今日の『実験』はやけに激しい。

ドガガガアア！！！！

「な、なんなのよコレ！？」

美琴の目の前にあったビルが破壊された。

辺りに粉塵が巻き起こり、視界が曇る。

中で一体何が起こっているのかは分からない。

この『実験』自体は世間に公開してはいけないものだ。

その『実験』がこんなにも激しくていいのか。

いいはずがない、何かがあったとしか思えない。

自然に美琴の足が動いた。

「こんなの絶対におかしい…私の命に代えても止めてみせる…！」

美琴は『第8地区』に飛び込んだ。

『第8地区』は瓦礫の山となっていた。

ドサッ

「えっ…!？」

美琴の目の前に何かが落ちた。

それは学園都市最強の男にして、美琴がもっとも恨む人物であった。一方通行である。

『ベクトル変換』で外部からの全ての攻撃を弾き返すのにも関わらず、一方通行は血だらけだった。

「ふ、ふざけやがって…このオレが負けるわけねェだろオがア!!」

勢いよく立ち上がった一方通行は、足元のベクトルを変えて右方向にあったビルに跳んで行く。

ビルは一方通行との接触で激しい音をたてて崩れる。その喧騒の中で一人の男を見つける。

「内…人…?」

何で？

としか言いようがなかった。

しかし美琴はそのことよりも驚いたことがあった。

全壊したビルから一方通行が瓦礫と共に吹き飛んできた。

その瓦礫に立っていたのは内人。

そのまま内人は一方通行に殴りかかる。

普通なら反射される拳が反射されていないのだ。

「なんで反射されないの…？」

しかし、反射が効かないということは一つの希望が見えた。

『勝利』

そのことが『実験』にどのように関係するかは分からない。
そして美琴は思うのであった。

（一方通行がこのまま死んだらいいのに…）

そうすれば、この醜い『実験』も終わる。
自分の妹達もこれ以上死ななくてすむと。

「お願い…勝って内人…！！」

自分が最低の人間だということは分かっている。

自分がDNAを提供したことにより、何千もの妹が死んでいる。
もしもそのことが世間に知られても、決して一方通行は法によって
裁かれることはない。

それなら内人が一方通行を殺してくれればどれだけ嬉しいことか。
嫌悪感もあるがそれしかないのだ。

たとえば自分が最低の人間になろうとも。

最強の能力VSZEROの能力4（後書き）

短いです…

最後はかなりネガティブですね…

まあー考えたくもなりますよね。

もし、俺が美琴ならこんな感じだろうなと思って書きました。

それでは次回も頑張りますので、ヨロシクお願いします！！！！

最強の能力VSZEROの能力5

黒子が『第8地区』に着くとそこは、まるで空爆にでもあったかのようだった。

そこで一人の少女を見つけた。

「お姉さま!!」

美琴はある一点から目を離さない。

あたりは武装したアンチスキルがいっぱいいる。しかし、誰一人として動こうとはしなかった。

「くっ…誰も止めないならわたくしが…!?!」

美琴が黒子の腕を掴んだ。

「無理よ…止めれるはずがないわ…」

「どうしてそんな事が言われますの!?! Level15のお姉さまなら止めれる…」

美琴が一気に強張り

「無理なものは無理なのよ!! 止めれるならとっくに止めてるわ! あそこにいるのは、学園都市第一位の一方通行よ! 同じLevel15でも強さの次元が違いすぎる!」

止めれる? 冗談じゃない。

今止められたら『実験』が再開されるかもしれない。

たしかに一方通行は最強だ。

その最強がLevel 1の能力者に負ければ、研究者達は呆れをきらせて『実験』を辞めるはずだ。

本当は一方通行なんて大して強くないと。

もちろん、そんなの嘘っぱちだ。

しかし、そうせざるえないのだ。

「お姉さま…わたくしは行きます」

「ちよっ…今の話し聞いてた！？あの中には内人がいるわ、でも学園都市最強の能力者もいるのよ！？今、黒子が行っても殺されるだけよ！！」

黒子は笑顔で美琴に言い返す。

「わたくしはジャッジメントですの。たとえ命が危険になろうと関係ありませんわ！」

はっきり言うとは完全に嘘だ。

死ぬのは怖い、しかし内人を失うのはもっと怖い。

黒子は気付いてしまった。

自分は内人のことが好きだということを。

ヒュン！

黒子はテレポートをして美琴の手を振り切る。

「怖くないの…死ぬのが…なんでよ…」

後輩である黒子が格好よく見えた。

(やっぱり私がおかしかったのかな…)

人を殺す『実験』が、人を殺して『実験』を終える。
やはり、それでは駄目なのか。

一方通行が死んで『実験』が終えても後悔してしまうような気がした。

「くっ…駄目な人間だな私って…」

美琴の足が動く。

「黒子ばかりカッコイイのは気が引けるわね!!」

足は次第に早くなり、瓦礫の山を上がり始める。

最強の能力VSZEROの能力5（後書き）

まあアレです。

美琴には善人でいてほしかったんですよ。

結構好きキャラなんで…

それではまた！

最強の能力VSZEROの能力6

一方通行は今起きてることが夢のように思えた。

『ベクトル変換』

その能力がまったく通じないどころか、相手も同じ『ベクトル変換』を使ってくるのだ。

そうなるフィジカルの弱い一方通行が圧倒的に不利になる。

「ざアケンな！！！」

一方通行は拳を握り内人に打ち込む。

しかし、当たっても反射されずただの拳になってしまう。

筋力のない一方通行の拳なんて内人にとってダメージにすらならない。

一方通行は初め感じることになる。

『負け』

生まれてから『負け』という事を知らなかった。

それがひたすら怖かった。

だから負けるわけにはいかないのだ。

「うぐっ！！」

内人のストレートが一方通行の顔面を捕らえる。

吹き飛ばされた一方通行は『ベクトル変換』で瓦礫を内人に飛ばすが、内人も『ベクトル変換』を使いそれを弾き返す。

「負けるわけには…いかねェだよォ!!!」

一方通行は再び拳を握るが、足元のベクトルを変換させて内人が勢いよく一方通行に襲いかかる。

「ンぎっ!」

またしても内人の攻撃は一方通行にあたる。
その攻撃で一方通行は立てなくなる。

「おい、発狂野郎! 美琴を殺した罪こんなもんじゃねーぞ!」

「ハア…ハア…」

一方通行は息を切らせてるため、言葉がでない。

「『実験』だが高んだが知らねーが、俺の友達を殺したんだ! テメーには悔いを改める時間すら惜しい、よってお前は…」

内人は拳を構えて、

「今すぐ死刑だ!!! こおんの発狂野郎があ!!!」

拳が一方通行に振り落とされる瞬間、内人の前に黒子現れた。

「なっ!?! どうして黒子がっ!?!」

「やめて下さい内人様!!!」

「だってソイツは…」

「どんなことがあると、人を殺すことは犯罪ですわよ！それと周りを見て下さいます！」

「周りって、アレ！？」

「どうやら、内人は無意識だったらしい。

さっきまであった工場が全壊してるのにも驚いたが、アンチスキルとジャッジメントが『第8地区』を取り囲んでるのを見た時は鳥肌が立った。

それと一方通行を殺そうとした事も無意識にやっていた。

「ん…：どうやら俺は大変な事をしてしまったらしい…」

「何を悟ってるのですか内人様！人をどれだけ心配させれば…」

ガサッ

「オレは…まだ負けてねェ…」

一方通行が立ち上がる。

身体は血だらけで、足は今にも崩れそうだった。

「もう、『実験』なんて止めてよ！！」

いつの間にか美琴がいた。

頬には涙を流しながら

「そんなに『Level 6』になりたいの！？お願いだから…もう

妹を殺さないで…」

「『実験』だア？ そんなもンどうでもいい！ オレは負ける訳にはいかねェンだよオ！！！！」

「負けたっていいじゃない！？」

「負けたっていいだア？ 負けたオレに一体なンの価値があンだよ！？ 最強じゃないオレはどうなンだよ！？」

「アンタって…悲しいヤツね」

美琴は思った。

一方通行は本当はかわいそうな奴だということを。

今の一方通行を見ると、あの『実験』を行っている人だとは思えなくなってくる。

約一万もの妹を殺したのも、ただ『Level 6』になりたかっただけなのか。

本当は他にも理由があるんじゃないか。

「ンだとオ！？ オレが弱いつて言いてエのかア！？」

「そんなこと言ってるんじゃない。ただアンタは『Level 6』以外にも目的があつて『実験』をやったんじゃないかなって思っただけ」

「他にも目的？ オレはただ『Level 6』になる以外、生きる目的がねェからだ…あ…」

一方通行は気付いてしまった。

別に『Level 6』なんてどうでもよかった。
ただ寂しかったのだ。

その心の穴を埋めるために『実験』をやっていた。
美琴が『止めて』とさえ言ってくれば良かった。

そうすれば一方通行は『実験』を止めていた。

本当は『実験』なんてやりたくなかったんだと。

しかし、その寂しさを紛らわすためはやるしかなかった。

「オレは…本当は…『実験』なんてしたくなかったんだ…」

「それならもう『実験』なんてしないでよっ…」

「それならオレはどうすればいいんだよ！何を目的に生きれば良いんだよ！？」

「俺らと一緒に仲良くやれば楽しいんじゃないか？」

状況はうまく読めないが、とりあえず口を出してみた内人。

「その『実験』つーのはよく分かんが…今、美琴が目の前にいることもよく分かんが…まあ人生なんて楽しくないや損だろ？」

「オマエ馬鹿か？オレは一万もの人を殺してんだぞ？」

「たしかにそうだが…今の話を聞いてる限りは悪い奴には見えな
いし…つーかその『実験』を考えた奴が悪いんじゃないのか？」

「世間はそんな風に思わねえよ…まあいい…『実験』はもう止める
…」

一方通行は歩き始めた。

「最後に言っておく…この事を外部に言うな。もし、外部に漏らしたらオマエらの命がねエからなア…」

「ちよっ、まだ話しがっ!？」

「オレは…どうすれば良いんだろうな…」

「ジャッジメントに入ります？」

「「ハイ!？」」

内人、美琴、一方通行が息を揃えて言った。

「オ、オイ!話しが読めねエのはオレだけかア!？」

「大丈夫!俺も読めないから!」

「く、黒子?話しの方向が…」

「ように、殿方は自分の犯した罪の償い方が分からないだけですの。だから罪の償いとしてジャッジメントに入って世の中に貢献すればいいのですわよ」

「な、なるほどなア…ってオイ!？」

「あ!一方通行がノリツツコミを!」

「オレは人殺しだぞ!?!恐くねエのかア?」

黒子は笑いながら

「今、ジャッジメントは人手不足ですわ。殿方のような人でも大歓迎ですの。ただし、二度人を殺さない事が条件ですけど…」

「暇だったらな…オレは疲れた、もう帰るぞ」

一方通行は再び歩き始める。

「一見落着かあ…ん？」

内人は安心する間もなく視界がぼやける事に気が付く。

さらに、今までなかった所に切り傷が出来ていることに気付いた。ぼやけたと思った視界は赤く、至る所から血が出てることに気付いた時には内人の意識は途切れていた。

最強の能力VSZEROの能力6（後書き）

ふう〜…苦手な戦闘がやっと終わりました。

一方通行さん…大好きなんですよ!!

頭の中には色んな一方通行さんがいます！

その中で『善人』になる一方通行を描きました。

それでは次回作で！

最強の能力VSZEROの能力7

「気持ちいい朝だな～……何でまた病院に!?!」

目が覚めるとそこは病室。

「いや～…また倒れちゃったのか…」

「まったくだよ…アレだけ忠告したのに…」

扉を開けて入って来たのはカエル…もとい『冥土返し』。

「君、何日間寝てたと思う?」

「わからないですね…」

即答した。

「一週間だよ」

「へえ～一週間かあ～……まじっすか!?!」

「本当だよ」

「くっそ～…俺の夏休みが削られるう～」

最近、有り得ないほど病院居る気がした。
事実なのだが…

「一つは嬉しいお知らせ、もう一つは悲しいお知らせがあるけど…
どっちを最初に聞く？」

「悲しい方で」

「君の今まで覚えてきた能力が使えなくなった」

「ふーん……嘘だろっ!？」

「しかも、その能力は二度覚えられない」

「どう言うことですか？」

「簡単に言うと…覚えたの能力の持ち主から、もう一度能力が覚えられなくなったってこと」

悲しい事実だった。

話しをまとめると、内人は全ての能力を忘れ、二度と同じ能力を覚えることが出来なくなった、ということらしい。

と、言っても発火能力を覚える時は覚える人を変えれば覚えれるのだが、黒子のテレポートを覚えることが出来ないのが痛い。

違う、テレポーターなら問題がないらしいが、学園都市には何人もいないらしいので期待しない方が良いと言われた。

「嬉しい知らせは、一方通行がジャッジメントに入ったことだ」

「えっ!?! あ、あいつが!?!」

「しかも、たったの一週間でかなりの活躍を見せてるらしいよ」

「こ、怖いな…」

「まあ、良かったじゃないか」

「そうですね」

「あと、また今日で退院出来るから」

そういうと冥土返しは部屋から出ていった。

「まあ…何とか終わりましたか…」

「そうですね」

「ああ…黒子か…っていつの間に!?!」

気付くと内人の寝ているベットの隣に黒子がいた。

「え、え〜と黒子さん?何か怒ってらっしゃいます?..?」

「は〜…人がどれだけ心配したことか…わかってらっしゃいますの?」

「あはははあー…本当にすいませんでした…」

ガラガラ

ドアの開く音がした。

「な・い・と〜!!」

インデックスが飛び付いてくる。

「ちよっ!? な、なんでインデックスが!?!」

「よお、大丈夫か内人?」

「と、当麻?」

どうやら訪問者はインデックスと当麻だった。

「は〜:ないとが居ないとわたしのお腹が満たされないんだよ」

飛び付いてきたインデックスはモゴモゴと言った。

「んだとインデックス!? 俺だって頑張ってるじゃねーか!!」

「とうまの料理にはボリュームがないんだよ」

「くっ:否定出来ない所が:当麻さんだって頑張ってるのでせうよ
:」

「なんですの、このシスターは!?! ちょっと内人様から離れて下さ
いる!?!」

いつもの光景? が目の前で繰り広げられる。

何だが心が安らぐ気がした。

こんな賑やかな毎日が続くば良いなと思う内人であった。

最強の能力VSZEROの能力7（後書き）

今回で『最強の能力VSZEROの能力』は終了です。

僕は内人にどうしても、

「死刑!!」

って言ってほしかったんですよ!!

→ニードレスネタです。

しかし…テレポートはやり過ぎました…

強すぎますよ内人さん…

だから、綺麗さっぱり忘れてもらいました。

文章が下手で分かりづらいと思いますが…なんとか組みとって下さい!!

それでは次回作で会いましょう!!

運命の分岐点（前書き）

美琴、一方通行と黒子が主に出て来ます。

運命の分岐点

「まったく：何でこんなに雨が強いのかしら：」

美琴は街を歩いていた。

腕に抱えているのは花束。

別に誰かを祝うわけではない。

「初めて：だよね」

今まで恐くて行けなかった。

そこは、妹達の墓。

と、言っても一万もの人を一つの墓に入るわけにもいかないので、
全ての妹達は焼却炉で焼かれた。

「ここか：」

そこは研究所の庭にあった。

「ん？」

よく見ると焼却炉の前に人がいることに気が付いた。

雨が降っているのに傘を差しておらず、右手には美琴と同様に花束
を持っていた。

一方通行だ。

彼はただ焼却炉を眺めているだけ。
何かをする気配もない。

「なんでアンタがいるのよ？」

一方通行は何も言い返さない。

「ちょっとアンタ！人の話し聞いてる！？？」

それにムカついた美琴が声を上げて一方通行の目の前に立つ。

「あん？なんだ…テメーもいたのか」

どうやら一方通行は『反射』を使って外部の音を聞こえないようにしていたらしい。

「なんで傘差してないのよ？」

「必要がねェからだよ…反射で全部弾いてるから…」

「そうなんだ。アンタ…なんでそんなに元気ないの？」

妙に一方通行の顔が暗かったので、つい美琴は聞いてしまった。

「責任かンじてンだよ…最初からオレが拒めば、この『実験』はやらずに済んだのになァ…」

「以外と暗いのね…」

美琴は焼却炉の前に花束を授け、拝み始めた。

「本当にくだらねェことをしたな…恨まれても仕方ねェよなオレな
ンて…」

美琴は目を閉じたまま言う。

「そうかもね…でも、この『実験』がなかったら…あの子達も生まれなかった」

「そんな風に考えたことなかったなア…」

「下を向いてるだけじゃ、前には進めないわよ」

「ポジティブ思考ってかア？」

「正確！」

美琴は一方通行に笑いながら言った。

「ありがとね」

「はア？頭大丈夫かア？」

「うるさいわね。人が『ありがとう』つってんだから素直に受け取りなさいよ馬鹿！」

「おもしれエ奴だな」

「あれー『ババア』じゃなかったんだっけ？」

意地悪そうに美琴が言う

「ちっ…その事は忘れろ…」

「ん〜？『忘れ下さいお願いします』って言ってくれたら忘れてあげるのに…」

「言わねェ…」

一方通行は花束を置いて歩き始めた。

「ちよっ、待ちなさいよ！」

それと同時に美琴も歩き始めた。

「ン？何してンだよ？」

美琴は一方通行に傘を被っていた。
相合い傘というヤツだ。

「気味悪いでしょ。傘さしてないのに雨に濡れないって」

「勝手にしろ……いつまでついて来ンだよ？」

「さぁね…暇なのよ」

嘘をついた。

美琴は一方通行が、どんな奴かまったく知らない。
知らなくてもいいと思っていた。

しかし今は違う。

思っていた想像の一方通行と、隣にいる一方通行は明らかに違うのである。

そこに興味を抱いてしまった。

「なんか視線が痛いわね」

「気にすんな…っ！かほとんどはオマエのせいだけだなア…」

相合い傘をしている人は何処にでもいる。

しかし、その彼女が常盤台となると話は別だ。

あの常盤台のお嬢様と相合い傘をするとなると、周りから注目を受けてしまうのも仕方がない。

「うゝ…しょうがないわ。あそここのファミレスに入りましょ！」

「あア？」

明らかに一方通行は入りたくなさそうだったが

「いいじゃない。暇でしょ？」

「ちよっ、オイ!？」

一方通行は美琴に手を取られて強制的にファミレスに入るハメになっ
てしまった。

運命の分岐点（後書き）

黒子でませんね…

出て来るのは、後の方になると思います。

いつもとは違う、美琴と一方通行を描けるように努力します。

それではまた！！

運命の分岐点2（前書き）

会話文多めです。

運命の分岐点2

ファミレスに着くと、店員に言われた席に二人は腰を降ろした。
美琴は一方通行にメニューを見せながら

「アンタは何する？」

「ブラックコーヒー」

「わかった、すみませーん！」

美琴が店員を呼んで

「ブラックコーヒーを二つにフライドポテトのMサイズを一つ」

「はい。かしこまりました」

店員がいなくなると

「コーヒーとフライドポテト…どんな神経してンだよ…」

「う、うるさいわね！別にいいじゃない!？」

「ハイハイ…」

「まあいいわ。いくつか質問があるけど聞いてもいい？」

「ヤダ」

「じゃ最初の質問を」

「無視かよ…」

「『一方通行』ってのは本名？」

「ンなわけねェだろ」

「それなら本名は？」

「知らないねェ」

「は？」

記憶喪失もいい所だ。

学園都市第一位の男が自分の名前を知らないのだ。
呆れて言葉が出ない。

「え、えーと…ふざけてる？」

「大まじめだァ。自分でも知りてェよ…」

「……………」

美琴は一方通行を睨む。

「そんなに気になるなら『バンク』で調べてみろよ」

どうやら一方通行の言ってることは本当らしい。

「わかったわ…二つ目の質問ね」

「容赦ねェな…」

「これからどうする気？」

「あン？そんなの知らねェっの」

「学校は？」

「行ってねェ…」

「友達は？」

「いると思うかア？」

「いないわね」

「即答だなア」

「それなら私が最初の友達になってあげるわ」

「ずいぶん偉そうだな」

「どうなのよ？」

「……好きにしろ…」

「んじゃ友達になってあげる」

そんな話しをしていると、ブラックコーヒーとフライドポテトが運ばれて来る。

「いや、フライドポテトは良いわね。アンタも食べる？」

フライドポテトにケチャップを付けて一方通行に差し出す。

「いらねェよ」

「いいから食べる!!」

美琴が無理矢理、一方通行に食べさせようと、テーブルを乗り出し口の中に入れようとした。

ブチャ

「ア、アンタ…何でこんな時まで『反射』させてるのよ!？」

一方通行はフライドポテトを弾くことに成功した。

しかし、フライドポテトは真ん中から切れ、美琴の顔にくっついた。

「クッククク…傑作だなア…」

「んゝ!!!!」

パサ

「な、なによ？」

「コレで拭けよ」

一方通行はテーブルにあったティッシュを美琴に差し出した。

「あ、ありがとう」

「……………」

実は責任を感じていた一方通行であった。

「あつれゝ、顔が赤いぞゝ」

「うつるせエ！」

「照れると赤面してしまう一方通行なのであった」

「なアに語ってんだよ!？」

美琴は貰ったティッシュで顔を拭くと、

「まったく…『実験』どうするの?」

「この期に及ンでやるわけねエだろ。笑えねエ冗談言うンじゃねエ」

「冗談じゃないわよ! つーかアンタが勝手に決めてもいいわけ?」

「やりたきゃ勝手にやれよ。オレにはもう関係ねエことだア」

ふゝ、と溜息をはいた美琴はコーヒーを飲もうとシュガースティックに手をかけた。

「オ、オイ!？オマエ何してンだよオ!？」

「見ればわかるでしょ？砂糖入れてんのよ」

「ざけンなっ！！！」

バン！！

一方通行がテーブルを叩く。

『反射』は使っていなかったため、テーブルは壊れずに済んだ。

「な、なによ？」

「そんなン入れたら、コーヒーの本来の味がわかんねエじゃねーかよ！！！」

「人の好みでしょ？別に良いじゃない」

「ありえねエ……オレは認めないからな……絶対」

「はいはい」

美琴がコーヒーに砂糖を入れてるのを見て「神への冒瀆だなア……」などと一方通行が呟いていた。

「学校は行ったほうが良いわよ」

「つまんねエ……」

「『つまらない』って……自分で何とかするものでしょ？」

「オマエは出来てンのかよ？」

「……………わからない」

「お互い様だろオ」

「話しの話題にはなるけど…その話しに入ることが出来ないのよね
…」

「そりゃ…L e v e l 5だから仕方ねエ…」

妙な所で気が合ってしまう二人。

「……………」

「……………」

「何か話さないよ」

「話題が見当たらねエンだよ」

「……………」

「……………」

「ジャッジメントに入るの？」

「あー…わかんねエよ」

「男でしょ？ハッキリしないよ！」

「オレが入ったって恐がるだけだろオ？」

「た、たしかに…」

「噂によれば、オレはジャッジメントでブラックリストに載ってるらしいぜ」

「アンタ…何やったのよ？」

「よく襲われるンだよオ…まア、全員潰したがなア…」

「やっちゃったわね…」

「……………」

また沈黙になる。

（な、何でまた黙るのよ！？）

その沈黙を破る救世主が現れた。

「あら？お姉様じゃありませんか。殿方もいらっしやいましたの」

「く、黒子？どうしてココに？」

「お二人がどうしても来たいと…」

黒子の後ろにいた女の子二人が出て来た。

「あつれゝ、御坂さんじゃないですか？」

「お久しぶりです」

「左天さんに初春さん!？」

「んゝ! こっちの方は…まさか!? 御坂さんの彼氏ですか!？」

佐天が一方通行を見ながら言う。

「いえいえ…お姉様がこんな不粹な殿方と付き合ってるわけがありませんわ」

「くっ…ババアみてエな喋り方しやがって…」

「今なんと…」

「ババア」

「どこがババアなのですよ!?! まだ中学生ですよ!?!」

「中学生はよオ…立派なババアなんだよ」

美琴は黒子と一方通行のケンカ? を止めに入る。

「ちょっとアンタ達! ファミレスで何やってんのよ!?!」

その美琴の言葉に黒子は渋々、

「わ、わかりましたわ…」

黒子は席にすわろとするが、

「どう座りましょうか…」

テーブルは四人の席で、美琴と一方通行は両者向かい合うように座っていた。

すると佐天が、

「それならこうすれば良いんですよ!」

美琴の腕を掴むと、

「ちよっ佐天さん!？」

美琴を立てせて一方通行の隣に座らせた。

「そんでもって…」

二人用の椅子に

黒子・初春・佐天
の順番で座らせる。

「せ、狭いですわ…」

「仕方ないですよ白井さん」

「うんうん! 初春の言う通り!」

この後、初春と佐天に質問責め（主に佐天）をくらう一方通行がいたと言う。

運命の分岐点2（後書き）

や、やっとテストが終わりました〜！

なかなか…いや、まったく小説を書くことが出来なかった…

しかしこれから投稿ペースを…上げれば良いですねハイ！

しかし佐天さん…

まさかアンタ…！！

「第四波動…！！」

ないな…多分…笑

と、言うわけで次回もよろしくです！

運命の分岐点3（前書き）

ヤベー…

全然投稿スピードあがないよ…

誰か助けてえー！！

あ、もう一つ！

今回も短めです！

すんまそん…

運命の分岐点3

「あのー、そちらの白い髪の毛の人は名前なんて言うんですか？」

「…一方通行」

「……………んっ？」

「……………一方通行」

「ア、アクセラレータ？」

「……………」

静かにうなづく。

その言葉に驚く少女がいた。

「一方通行って、あの『学園都市第一位』の一方通行ですか？」

「それ以外にいると思うかア？」

「す、すいません…」

何故だか初春は俯いてしまった。

「何、脅してんのよ？」

「いや、脅したつもりはねェンだが…」

「つーかなんなの？その白い肌に白い髪？しまいには赤い目だし…」

「…なんでもカンでも反射してきたからなァ…当然の結果だろォ？」

「気持ち悪い…」

「ちよっ、気持ち悪いってオイ！殺されてェのかオマエ！？」

「あゝあ？またこれ以上犯罪を犯してもいいのかな？」

「くっそ…」

「「……………」」

二人のやりとりを見て、啞然としていた初春と佐天。
それに呆れをきらした黒子が

「Level 5ともあろうかたが何をされていますの？」

「「……………」」 カァァ／／／

「どうされましたのお姉様に殿方、そんなにお顔を赤くして？」

「うるせえ…」

「そ、そうよ！ちよつと黒子は黙…！？」

黒子は静かに指をさす。

その先には初春と佐天がいた。

二人とも肩をすくめて美琴と一方通行を見ている。

「あのー、私達って邪魔物なのかな？…ねえ初春？」

「そ、そうみたいですわ佐天さん！」

「うっ!？」

（糞面倒臭せエ！）

今日、家を出たことを呪う一方通行であった。

「はあー、良いなあー御坂さんと一方通行さん」

「ど、どうしたの佐天さん？」

いきなりの質問に戸惑う美琴。

「それやうらやましいですよ。私って無能力者ですよ？お金だつて全然入らないし…ハア」

「私だって最初はLevel1だったんだし、佐天さんだってきつとLevelが上がるわよ」

「そうだといいんですけど…」

余計に落ち込む佐天を見て一方通行は

（オレは…気付いた時にはLevel5だったしな…佐天つつたけ？コイツの気持ちはわかんねエ…けど、オレより楽しい人生を送っ

てきたンだろオな……ってなアに情が移ってンだよ!?)

一方通行は訳もわからずに口が動いてしまった。

「オマエは今、楽しいかア？」

(何やってンだよオレ!?)

「た、楽しいって、楽しいに決まってるじゃないですか!？」

(くっそ!もうなるようになれェ!!)

「ならいいじゃねェかよ」

「えっ？」

「たしかにオレはLevel5だア。けどよオ、決して楽しい人生ではなかった。いや、やり直せるものならやり直したいぐらいの気持ちなんだが…」

一瞬だが、一方通行は美琴の方を向く。

「何よ？」

笑いながら一方通行は言う。

「なアンでもねェよ。オマエならわかるかなア~と思ったただけだ」

「まあ、わからないこともない…かな？」

「Levelが高いからってべつに楽しい人生が送れる訳じゃねえんだ。あんま気にすんな」

「そうですか…」

「そうですよ佐天さん！元氣だして下さい！」

「…そうよね。私らしくなかったわよね！ありがとね一方通行さん」

「オ、オウ…」

一方通行の白い肌の頬が少し赤くなる。

「アレ？アンタ照れてんの？」

「照れてねえよ…」

「またまた嘘ついちゃて」

「ついてねえ…」

「うゝ、そろそろ認めなさいよ！」

「アァー！！オマエら！今日はオレの奢りだァ！好きなもののため
…！！」

「本当ですか！？」

「ありがとうございます一方通行さん！」

初春と佐天は目を輝かさせて一方通行を見る。
さらに顔が赤くなっていった。

「さすがボンボンの言うことは違いますの」

「ボンボン言うなア！つかオマエも金持ってんだろがア！？」

「あゝ、五月蠅いですわ…まったく…」

「くっ…」

そんなこんなで初春と佐天と黒子はメニューを見始めた。

「どうよ？」

「ン？」

「楽しいでしょ？こういうのも？」

「悪くはねエ…」

「また固いこといっちゃて」

「うるせエ…」

運命の分岐点3（後書き）

どうでした！

…この短かさじゃ『どうでした！』って言われてもねえ…

すんまそん…

多分、ファミレスのくだりは終了です。

佐天さんに

『第四波動！！』

って言わせてえ〜！！笑

んん！？

『エデنزシード開放
第五波動！！！！』

これもいいな！！

まあ、いないと思いますけど…

上記二つのどちらかをだしたい！っと思う人は感想にでも書いて下さい。

出来れば書きます。

と、言うことで今回はさいならです。

次回であいましょう!!!

運命の分岐点4（前書き）

すいません…誤字、脱字があるかもです…

運命の分岐点4

「いやゝ、美味しかったです」

「そりゃよかった」

一方通行とその御一行は無事？にファミレスから帰還した。

ブーブーブー

「なんの音だア？」

「あっ！？すみません！私の携帯のバイブ音です！」

初春は持っていたバックの中から携帯を取り出した。

「固法さんですか、どうしたんですか？」

『初春、仕事よ』

「仕事って何ですか？」

『〇〇地区で火災が発生、至急アンチスキル、ジャッジメントに連絡すること』

「それって固法さんがやれば…」

『ゴメン、今それが出来ないのよ。スキルアウトを追ってる途中だから！』

「わかりました。現場に白井さんと向かいます」

「どうしましたの、初春？」

「〇〇地区で火災が発生しました！」

「了解しましたわ！」

「黒子手伝うわよ」

「ありがとうございますお姉様！」

三人は走り出す。

その姿を見ている一方通行と佐天。

「いっちゃいましたね」

「…だな、今日はお開きだ…」

「あ、一方通行さん！途中まで一緒に帰りませんか？」

「ン？あア、べつにいいけど…」

「やった！んじゃ、さっそく帰りますか！」

「…りょうかい」

二人は歩く。

とくに何かを話す訳でもなく。

歩き始めてから20分くらいのことだった。
辺りから鉄パイプやら金属バット、中には拳銃を持った青年達が現れた。

「よお、一方通行」

「……………」

「一方通行さん…あの人達誰ですか？」

「知らねェな…」

「オイ！無視するとはいい度胸してんじゃねーか！？」

「いつまでも俺様気取ってんじゃねーぞ一方通行」

一方通行はその青年達を無視して歩き始めた。
もちろんその手には佐天の手が握られている。

「いくぞ」

「あ、はい」

「なめんなよ！！！」

バットを持った青年は一方通行に殴りかかる。

「ぐあぁっ！！！！」

しかし持っていたバットは折れ、青年の手は万力に挟まれたように

潰れていた。

「ぶざけやがって！」

拳銃を持った青年は銃口を一方通行ではなく、佐天に向けた。

「どうだ！これならオマエもどうしようもないだろ！？」

「ひいっ！？」

佐天は銃口が自分の方に向いてるのを確認すると震え始めた。

「たつく…雑魚は小細工が好きみてエだな…」

一方通行は小声で言う。

そのナメた言葉に怒りを感じた青年は叫ぶ。

「ナメてんじゃねエエエエエ！！！！」

引き金が下ろされる。

爆発音とともに銃弾が放たれた。

だが、その銃弾が佐天に届くことはない。

「ぐっああああああ！！！！！！」

銃弾は腕を貫通し、腹部にもダメージを与えた。
その攻撃を受けたのは青年だった。

「バ、化け物だあ…」

青年は倒れている仲間を見捨てて走り去った。

「学園都市もまだまだあめェなア…拳銃が出回っているとは…」

「うっ…うっ…」

「ン？」

拳銃を向けられ、極度の緊張状態から解放された佐天は、まるで糸を切られたマリオットのように座りこんでしまう。
そして泣き始めてしまった。

「オ、オイ！大丈夫か！？」

大丈夫な訳がない。

一方通行は慣れている事かもしれないが、佐天にとっては最初で最後かもしれない出来事だ。

しかもそれが、命に関わることとなると尚更パニック状態に陥ってしまう。

「こ、怖かったよ…」

「え、あ…悪かった…オレのせいで危険な目に合わせちゃってェ…」

（オレはどうすればいいんだアアアアアアア！？）

と、内心叫ぶが状況が変わる訳がなかった。

「うっ…す、すみません…その…えっと…うっ…」

「た、立てるか？」

とても立てそうには見えない。

しかし、一方通行にはかける言葉がそれしかなかった。

「な、なんとか…んっ…：…キャ！」

一度は立ち上がるものの、足がすくみ転びそうになる。

「オっと！」

一方通行がそれを支える形となる。

「ご、ごめんなさい…：…足がすくんじやって…：…」

佐天の目には大粒の涙が、溢れんとばかりに溜まっていた。

「気にすんな」

「うっ…んんっ…：…」

気付くと一方通行の胸で佐天は泣いていた。

この時は流石の一方通行も、胸を貸さざる得なかった。

（くっ…：…あんまりこういうの…得意じゃないンだけどなァ…）

しばらくの間、佐天は一方通行の胸の中で泣いていた。

運命の分岐点4（後書き）

……かなり遅れました。

ありえないくらい投稿が遅い。

異常ですよ…このペースは…

自分でもわかってるんですけどねえ…

すんまそん…

それです…

佐天を能力者にする話です。

無しになりました！

……ごめんなさい。

何にも思い浮かばないんですよ。

まあ、思い浮かんでも文才がないから無理か！笑

そんなこんなで、次の投稿はいつになるかわかりません。

本当にすいません…

それでは次回で！！

運命の分岐点5

「それで佐天さんは大丈夫でしたの？」

「えっ…？だって怪我はしてないし…」

ただいま初春、佐天、黒子、美琴はファミレスで会議中。

「いや、怪我の方じゃないですわ。精神的な面で…」

「大丈夫ですって白井さん！一方通行さんが護ってくれましたから！」

一日前、佐天は謎の青年達に襲われた。

理由は佐天には全く関係がなく、奴らの目当ては一方通行であったからだ。

「それにしても一方通行さんは強いですね。」

「それや学園都市第一位よ。そこら辺のチンピラを倒すのわけないわ。」

あたり前だ。

一方通行は核兵器ですら傷を負わない。

そんな奴が普通の人間、能力者に負けるはずがない。

「ふう…：佐天さんは大丈夫だとしても：相手の方がボロボロですわよ？」

「相手…？一方通行さんにやられた人ですか？」

「そうです。今は病院に居ますが、時期に少年院にでも送られるでしょう。」

「はあ…」

「逃げた仲間の一人を捕まえて、色々と詳細を聞きました所…彼らはスキルアウトのメンバーらしいですわ。」

「スキルアウト？」

不意にも美琴が言葉を出す。

「ん…奴らも懲りないわね。」

「たしかにそうみたいですわね。」

初春もそれに頷く。

「スキルアウトのメンバーは過去に何回も一方通行にやられていますね。」

ジャッジメントとして、このようなデータを調べることは造作でもない。

「それもぜんぶ自滅。一方通行は何にもしてないわ。」

「スキルアウトのメンバーの話によりますと…」

一方通行はLEVEL1に負けた。
それなら俺達でも倒せるんじゃないか？
と、いうくだらないものだった。

「本当にくだらないわ。」

「全くお姉様の言う通りですわ…。殿方の考えてることは私どもには理解しがたいですね。」

一位を倒した先に何があるのか？

答えは人それぞれあるだろう。

ある人は優越感にひたり、そしてある人一位の権利を横暴にふるう人間もいる。

どれも答えであり、答えではない。

「アイツは何を見たのかな…」

「御坂さん？何が言いましたか？」

「ん？…なんでもないわ。」

アイツ…いや一方通行はそこで何を見ていたのか？

美琴はテーブルの上にあるグラスを眺めながら考えたのであった。

運命の分岐点5（後書き）

投稿が凄く遅いのにな文章が凄く短いですw

マジですいません…

最近本当に忙しくて←←

未永くヨロシクお願いします。

運命の分岐点6（前書き）

※誤字、脱字に注意。

運命の分岐点6

佐天達がファミレスにいるころ、一方通行はある公園の自動販売機の前にいた。

「……………」

一方通行は言葉を無くしていた。
そこにはある物がなかったのだ。
それは、

「ブラックコーヒーがねェ…」

一方通行は基本ブラックコーヒーしか飲まない。
しかしそこには微糖と書かれたコーヒーしか売ってなかったのだ。

「自販にはなんでこうもブラックコーヒーが少ねェんだア？」

と愚痴をこぼしながら自販の前に立っていた。
そこにずっと立っている訳にもいかず、近くにあったベンチに座る。

「…暇…暇すぎる…」

何もすることがなく、ただただ空を見上げていた。

「…学校でも行くかア…」

「おー！それは良い心がけですなアクセラレータ君。」

「なっ？誰だオマエっ…て上条、当麻だっけかア？」

「名前を覚えてくれるとは感心だ。」

いきなり後ろから名前を呼ばれ少し同様するも、認識がある人物だと知りすぐに平静となる。

「…何故オレの隣に座る？」

当麻は一方通行の隣に腰をかけた。

「何故って…ここが公園のベンチだからだよ。」

「…………チッ」

舌打ちをする。

した理由は苦手だからだ。

けして当麻のことだけが苦手というわけではなく、こういう空気そのものが苦手なのだ。

「お前って学校行ってないらしいな。」

「……………」

「よく単位とれるな。」

「えこひいきってヤツだろ？」

「LEVEL5は良いですな。上条さんは少し気をぬいたら留年の危機ですから。」

「ご苦労サンLEVEL0。」

一方通行は当麻の方を見て言った。

それも笑いながら、

「ぬおっ！それは全LEVEL0を敵にまわしたことになるんだぞ
！？」

必死に言う当麻を見ながら一方通行が

「ハイハイ…さっきの発言は聞かなかったことにしてくれ…」

「ちゃんと聴いたんだぜ、この耳でよお！」

「クククツ…何を熱血に話してンだよ。」

よく噛み合わない話をこの後も続けた。

悪いものではない。

一方通行はそう思えた。

今までつまらなく、退屈なものだと思えたものが、そうではない違うものに見え始めたのだ。

運命の分岐点6（後書き）

お久しぶりです！

あれ、この小説の作者何してんの？

小説投稿すんの遅くね？

まさか死んじゃった？笑

と、思った方…生きてます！笑

大丈夫です、なんとか生きてます。

いや、それにしてもすいません。

最近、テストとか部活とか、大変だったんですよ。

まあ一ヶ月に一回は投稿したいです、ハイ。

次回は早めに投稿したいと思います。

それでは！！

運命の分岐点7（前書き）

誤字、脱字、キャラ崩壊に注意。

運命の分岐点7

当麻と別れた一方通行は、街の中を歩いていた。

「どこで買えばいいんだよ…」

何を買うって？

「洋服だァ…って何にツツコンでんだオレは…」

さっき当麻に言われたのだ。

『お前ってさ、いつも同じ服着てるよな。ファッションとか気にしないタイプなんですか？』

今まで気にする必要がなかったので、いつも同じものを着ていた。

「さすがにいつも同じ服着てると…気持ち悪いよなァ。」

とりあえず街の中を歩く。

人混みを嫌う一方通行は基本、ベクトル変換を使い外部の音を反射している。

「（つーかマジで何処いきゃいいんだァ!?!）」

それはいきなりだ。

誰かに服を握られ動けなくなった。

「あァ？誰だ？」

反射をやめて後ろを振り向いてみる。

「あ、あの…どうして無視するんですか…?」

「……………」

服を掴んで、涙目になっていたのは佐天だった。

……………こりゃやっちゃまったな。

だってまさかねェ、俺に声かけてくるヤツなんて、いると思わないでしょ?

つーことでなんか涙目になってますけどオ、俺のせいじゃないから…ってことにはなンないよな。

正直一方通行が考えてることも一律ある。

一方通行は人を寄せ付けない、なんらかのまがましいオーラみたいなのを放っている。

しかも無意識で。

一般人だったらまず声をかけない。

知り合いでも際どい所だ。

が、コミュニケーションが苦手な自分に非があることも認めている。結果的には考え方、コミュニケーションなどさまざまな所をとっても一方通行が悪い。

「…やっぱり…私なんか声かけられるの…イヤ…ですかね?」

イヤイヤ何をおっしゃてるンですか?

その心の準備というか…って別にドキドキしてる訳じゃねェーからなァ!

ただいきなり声かけられると対応に困るだけだぞオイ!
よし!

勇気を出せオレ！

テンパるな！

んじゃー声かけちゃいますよオー！！

気合い？を入れた一方通行が言った言葉は、

「オレの今の服装ってどんな感じ？」

エッ…ナニイッテルノジブン？

…イヤ…マジで意味わかんねエ…。

自分のキモさにビックリだわ。

思っていることまったく関係のないことを言ってしまった。

『さつきは悪かった。お詫びとしてはなんだが、そこの喫茶店でお茶でもいいかが？』

みたいなことを言おうとしたらしい。

「ふ、服装ですか…？」

「あ、あゝ、そうなんだよ。服装のことなんだが…」

「えゝッとですね。…个性的だと思います。私は…その…結構好きですけど…」

最後の方なッていったんだろう？

と、疑問を残しながらも个性的な服装だと言われたことを、喜んでいいものか、悲しんでいいものか…うゝん、難しい。

「あのさ…服ッてどこで買えばいいんだア？」

「例えば…」

まあ色々な所をあげてもらった。
うん、一つも知らねエーけどな。
っーか場所がわかんねエよ。

「あ、ありがとな」

「い、いえ、こちらこそ力になれて嬉しいです！」

さーてどうするオレ。

店の名前だけじゃなンにもわかんねエぞ。
しかたねー…

「す、すまねエ…場所がわからねエンだ。教えてくれないかア？」

「あッハイ！私でよかったら！」

「それは助かるぜ」

「それじゃ…何処から行きましょうか」

こうして佐天と一方通行は人混みの中を歩き始めた。

「そろそろ着きますよ」

「案外近エんだな」

「それや、服を売ってる所なんて何処にでもあるもんですよ」

「そうなのか…」

世の中にはまだまだ知らないことがたくさんある。

オレもまだまだ精進しないとダメだな。

一方通行の今見ている風景は、今まで苦手としていたものである。

それが今では苦手ではないものになっていった。

詳しくはわからない、しかし苦手ではなくなった、ということだけがわかる。

「ここでーす！」

そこは駅の近くにあったビル。

「ここッて…」

ただよく通る道にあったただけだ。

別に深い意味はない。

「オレッてマジでなんにも見てなかったんだな…」

「…ん？」

「いや…なんでもねえ…」

二人はビルの中に入った。

「メンズの服はここに売ってますよ」

「なるほど…」

「一方通行さんってどんな服が欲しいんですか？」

「…………自分にあった…ヤツで…」

「じ、自分に合ったやつですかあ？」

「あ、あア…」

困惑する佐天。

何がいいんだろうかと。

「うーん、似合うやつ…似合うやつと…」

佐天が選んだのはカジュアルな服だった。

ふむ…悪くはない。

いまどきの高校生が着そうな感じがする。

「とりあえず着てきて下さい！」

「お、おう…」

試着室に入り、佐天に渡された服に着替える。
サーっとカーテンが開く音がした。

「どうだ？」

「……………」

「ン？」

「す、凄くカッコイイです」

お褒めの言葉とはありがてエ。

別にオレが選んだ訳じゃないけどな。

軽いツツコミを自分に入れ、とりあえずこの服を購入することにする。

試着室のカーテンを閉め、着替えを始める。

「ふう…マジつかれたぜオイ」

いやマジで。

服を脱ぎ、もとの服に着替える。

着替え終わりカーテンを開ける。

そしてさっき佐天から選んでもらった服を買い物カゴに入れた。

「良し…会計済ませに行くか」

「そうですね」

……………

レジに並んでいる間のこの沈黙。

佐天は時折一方通行の顔を覗くように見てくる。

一方通行はそれに気づき、

「ン、どうした？」

「い、いえ何でもないです…」

「…？」

佐天は赤くなった顔を一方通行には見せまいと俯く。

そのやり取りが三回目の時ようやくレジについた。

それにしても今日は混んでいる。

かれこれ5分から10分はレジに並んだだろう。

「会計は45050円となります」

定員がそう言う

「え！？そんかにするんですか!？」

「え、ええ」

定員は明らかに困っている。

「あ、ああ」

やってしまった。

佐天は値札を見るのを完全に忘れていた。

服を選ぶので頭がいっぱいだったのだ。

「す、すいません。変に高いのばっか選んじゃって…違うのに?」

佐天は買い物カゴに服を入れて棚に戻そうと列を抜けようとした。
しかし一方通行は佐天の腕をしっかりと掴む。

「金のことは気にすんな」

「けど…さすがにコレは…」

たしかに普通の高校生にとっては高い値段だ。
一方通行は財布からカードを取り出す。

「支払いはコレで」

「かしこまりました」

定員は支払いを済ませて一方通行にカードを返す。
佐天はビックリしていた。

まず一方通行に手を（正確には手首を）掴まれたこと。
もうひとつは一方通行が出したカードがゴールドカードだったからだ。

「こ、高校生でも持つてる人っているんですね…」

普通の高校生はもっていないだろう。
そもそもキャッシュカードを持つてるかどうかすら危うい。

「あアー、御坂も持つてんじゃねエーか？」

「そ、そうなんですか？」

「まア予想だけどな」

やっぱりLEVEL5はすごいな。

佐天は自分とのあまりの違いに驚愕していた。

「店でるぞ。もうココにはようはねェ」

「あっ、はい」

一方通行が荷物を持ち、歩き始める。

その後を佐天がついて行く。

しばらく経った頃だった。

そこは近くの公園。

「今日は…その、ありがとオ」

頭を掻きながら照れくさそうに一方通行は言った。

「い、いや、私が好きでやった訳ですし…」

「それでも助かった」

一方通行は空を見上げながら話す。

「オレは今までさ、町で歩いている人間を見かけると、くだらねェ人生を送ってんだろオなとか思ってたわけなんだが」

「…」

「くだらねェ人生を送ってたのは、オレの方だア。何がLEVEL

5だよ、全然つまんねェーよ」

その言葉に佐天は何故か苛立ちを覚えた。

「私だってLEVEL5になりたかった！！学園都市に入る前は『絶対にLEVEL5になるんだ！』って意気込みで入ったんだよ！それなのに、それなのになんで無能力者なの？どうして私の目の前で『つまらない』とか言うの？それってとっても惨めなんだよ…？」

「…惨めだとオ？オマエのどこが惨めなんだよ。惨めつーのはな…オレのことをいうんだよ」

ああそうだ、惨めなのはオレなんだ。

オマエなんて全然惨めじゃない、困った時に助けてくれる人間がいんじゃないか。

「あなたのどこが惨めなんですか！…そんなに私をからかって…もう知らない！！」

「オ、オイ！？待てよォ！」

怒り浸透中の佐天に一方通行の言葉は届くはずはなく、走り去ってしまった。

「なんでキレてんだよ…」

まあ大丈夫だろ、また今度会ったら…な。

この別れが一方通行にとって人生を左右することになる。

運命の分岐点7（後書き）

お久しぶりっす!!!

ゴメン…いやゴメンなさい。

もうね…うん…ごめんなさい。

としか言えない。

こんなに投稿してないと皆に忘れられてるな。

投稿できなかった理由は…部活とかちょっと勉強とか…なんやかんやあった訳です。

実は次もいつ書き終えるかわかりません。

応援してもらえたら嬉しいです。

と、シリアス？な感じでしたが作品はどうでしたか？

まあ酷かったなコレ。

みたいなのか。

書き方変わった？

とかあると思います。

自分でもビックリなほどキャラ崩壊してます。

ここ笑うところです！！笑

一方通行じゃない！！！！

原作ぶち壊してますね。

ヤベエ…泣けてきた。

こんな感じですがよろしくお願いします！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0619/>

とあるZEROの能力者

2011年10月7日01時57分発行